
騎士と鈍感っ子（仮）

広い世界にちっぽけな人間。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎士と鈍感っ子（仮）

【Nコード】

N8580W

【作者名】

広い世界にちっばけな人間。

【あらすじ】

急に異世界とりつぶしてしまった「篠原凜」は膨大な魔力を有していることがわかる。しかし、最初に言葉が通じなかったせいで男装をするはめに・・・

設定（前書き）

と言う名の作者の忘備録。

読まなくても大丈夫だとは思いますが

設定

《魔術》

術者の魔力を動力とし、精霊に陣や、詠唱を用いて意志を伝えることによつて発動させる。

また、術を使つた際には余波的な魔力が放出される。

(この制御が長期戦では鍵となる)

力のあるものであれば、陣や詠唱を用いずとも、「想う」《イメージする》ことによつて発動させることができる。

・無詠唱

陣や詠唱を用いずに術を発動すること。

力の強い、もしくは精霊に好まれている者が用いる。

集中や「想い」が足りなかった場合、イメージと違う術が発動されることも多い。

《魔力》

殆どの人間が有している。

その中でも魔力を扱うことが優れたものが魔術者となる。

術者でなくとも、一般人でも感じることはできるが、あくまでほんやりとしたものでしかとらえることはできない。

また、所持する大きさは一般的に生涯変化することはない。

《精霊》

精霊界、もしくは地上に存在する。

人間のことを卑小な存在としてみている。

力のあるものは人間界の歪みを正す働きを持つ者もいる。
多くの精霊は自然に働きかけ、活動を促す。

術師に力を貸すのは、陣や詠唱に抗えないようにするものが含まれているためである。

心根の綺麗な者を好み、術を使う際にもほかの術者に対してより、大きな力添えをする。

・低級精霊

一番位の低い精霊。

力はあるが、気の赴くままに活動する。

精霊獣として召喚されても、強制的に解除されることも多い。

・中級精霊

二番目に位の低い精霊。

術師の欲するものを理解できるが、会話をするほどの知能はない。

だが、精霊獣となった際には、力は精霊時に所持していた力の半分となる。

・高級精霊

二番目に位の高い精霊。

自我があり、自ら進んで働きかけることもある。

精霊獣となった際にも力は変わらず、ごくまれに増えることもある。
目の色は金色となる。

・王

一番位の高い精霊で、数も数えるほどしか居ない。

契約にも気の向いた時のみ行つたため、存在自体があまり知られていない。

（他の精霊は召喚されれば拒むことはできない）

力を段違いに所持しており、高級精霊の十倍以上を有する。精霊獣時に人型をとることができるのはこの位だけである。（しかし気に入った者にしか見せることはない）目の色は金色となる。

《精霊獣》

精霊が術者と契約し、実像化されたもの。術者の力の大きさによって、召喚される精霊の位が決定する。一般的には術者に生涯付き添うが、強制的に解除されることもある。通常は幼少時に契約を行う。また、契約主とは離れていても会話することが可能。

術師の体には、精霊の印が契約時に彫られる。召喚主は獣の瞳の色の石のついた腕輪を、獣は召喚主の瞳の色の石のついた首輪をつける。

この輪は術者の身分証明の役割も果たす。

術師に反抗し、暴走することもある。殆どの場合、召喚獣の暴走を防ぐため、拘束魔術―《縛る》が義務付けられているが、高級精霊と「王」にはその限りではない。

《魔獣》

魔力を持った獣。

基本的には森深くや、人の近寄らない谷底などで暮らしている。時々人里に出てきて侵略行為を行い、人を屠る。

そのような場合や、力の強すぎるものについては騎士団が捕獲に向かう。

《石》

主に術者のつけるペンダントトップのことを示す。
力の強さによって種類が違ふ。

・貴水晶

別名「神の涙」。

最高ランクの術者が持つ。

設定（後書き）

随時追加していきます

1（前書き）

処女作です。駄文です。筆者の好きな要素てんこもりでかいてみました。

感想などいただけると泣いて喜びます。

「ここ・・・どこだ？」

と、座り込んでテンプレートな発言をするのは、

「どこにでもいる」「ごく普通の」女子高生、篠原凜だ。

こんなはずではなかった。

と凜は考える。

時は二時間前に遡る・・・

「「凜様ー！ごきげんようー！！」」

「ああ、また。」

そう答え、僅かにほほ笑むと、遠くで黄色い声上がる。

別段、そのようなつもりはない。

し、そのような趣味もない。

が、この「篠原凜」という女は男にみられる。

「いいのよ、凜は！男は男でも『美少年』だから！」

と中学からの親友は力説するが、フォローの出し方を間違えている。

確かに、この容姿は男に間違えられても仕方がない。

髪はベリーショートだし、身長も170センチにもなるうということである。

中高一貫の、この女子高に男がいるはずがないのだが、凜は毎日のように告白を受け続ける。

この容姿が気に入らないわけではない。

だが、勇気をだし、精いっぱい思いを凜にぶつけてきてくれた子たちに対して申し訳ないのである。

「そういう子は現実をみて強くなっていくのよ！」

・・・また、フォローの出し方を間違えている。

訂正するのも疲れ、早々に帰宅しようと考える。

廊下を歩けば、熱い視線が突き刺さり、

数少ない知り合いに声をかけようものなら
周りにいた子が倒れる音が聞こえる。

そんな、一風変わってはいるが、凜にとっては「日常」がいつものように通り過ぎていくはずだった。

途中で雨が降り出す。

雨に濡れながら歩くのは嫌いではないが、今はまずい。

風邪気味のこの体に鞭打ってまで楽しむほどの趣味ではない。

「ヤバいな・・・」

雨脚が強くなり、そんなつぶやきが零れる。

そろそろ走ろうかと思っていたとき不意に目の前が真っ暗になり、
・・・光で何も見えなくなった

そして、今に至る。

首筋には冷たい感触がして、動けば　ちり、と僅かな痛みがはしる。

「なんで・・・？」

後ろに感じる殺気をそのままにもしておけず、
ゆっくりと振り返り、上をみあげる。

後ろにいたのは「超絶」がつくであろう顔の整った御仁である。

深緑色の髪に、筋の通った鼻梁。

灰海色の瞳は強烈な意志を持ってこちらを見つめていた。

――きれいだな、この人も女の子に騒がれるのかな

と、命の危機が迫っているらしい

この場には似合わない感想を抱いていると、何か叫ばれた。

「○　×　＃　\$　％　&　；　@　！　？」

「え・・・？」

何を言っているのかわからない。
ひどく怒っていることは表情から感じられるが、言葉が通じない。
途端に恐怖がこみ上げる。

「\$、○ × # \$ % & ; @ ! ? ! ?」

「なにを、いつてるの・・・」

呆けた様子の私をみて、向こうはずっと剣をひいて、後ろに下がった。

「\$ % ○ × \$ # & . . .」

何かをつぶやき、そのまま大きく剣を振りかぶる。

どこもわかんないようなところで、死ぬのはいやだな
と思いつつも、凜は静かに目を閉じる。

・・・が、一向に衝撃がこないのを訝しく思い、目をあける。

どうやら男はもう一人いたようだ。

こちらの男も美形である。

白銀の長髪で、細目ではほ笑んでいるために、目の色は分からない。

「# * @ +」

間延びした声で、先ほどの男を止めているようだ。

「○ × ! ?」

口論をきいているうちに、眠くなってきた。

ああ、風邪、もっとしっかり治しておけばよかったな

と凜は思い、意識が遠くなっていく。

最後に見たのは驚いた様子の二人の男の目だった。

「おい、帰るぞ。」

「えーもう少し居ようよ、
帰ってもどうせあのつまないやつでしょ？」

「・・・サボるな。」

バレた？

と悪びれずに笑うのは俺の弓のパートナーだ。

王国騎士団では、「弓」「剣」「魔術」の三部署の新人から
一人ずつ選び、パーティーを組ませる。

多種多様な任務にもこのパーティーで取り組む。
組む目的は「お互いの長所を生かし、
任務遂行をより確実なものにする」ためであるらしい。

しかし、俺たちのパーティーには魔術師がない。

通常、パーティーは各々の力量を考慮し、組まれる。

しかし、俺たちの場合、俺たちに見合う魔術師がいなかった。

俺は傲りや自己陶醉ではなく、自分のことを強いと自負している。
それはこのパートナーにも言える。

弓の腕は確かだ。俺のパーティーに選ばれるくらいなのだから。

しかし、この性格には辟易する。

鍛錬はサバろうとするし、
女を見かければ誰それと構わず声をかける。

女は苦手だ。

厚かましいし、直ぐに泣く。
些細なことで怒り、喚いて己の正当性を主張する。

魔術師が女だったら
そんなことを考え、一瞬鳥肌がたつ。
だが、騎士団には女は入れない。
あの医者でさえ男なのだ。

そのことを思い出し、安心する。
と、

爆音がした

とも考えることができないほどすぐに、
膨大な魔力を感じた。

思わずパートナーと目を見合わせ、馬を向かわせた。

そこにいたのは、一人の人間だった。

これほど強い魔力を持った魔獣でもあったならば殺さなければならなかったため、些か安心して呼びかける。

魔獣とは、魔力を持った獣のことで

基本的には森深くや、人の近寄らない谷底などで暮らしている。だが時々人里に出てきて侵略行為を行う。

しかもそれは生きるためではなく、楽しみのためなのだから、性質が悪い。

「おい、そこのお前。」

人間は座り込み、静かに佇んでいた。

まるで神聖な、森に守られているかのような、そんな印象を受ける。だが、そんなことはあるはずはない。

「おい！聞いているのか！」

威嚇の意味も込め、馬を飛び降りて首筋に剣をあてる。

ふ、と空気が変わり、人間がゆっくりと振り返った。

吸い込まれそうだ

時間が止まった気がした。

そこにあつたのは零れ落ちそうに大きく見開かれた漆黒の瞳。

一瞬でも体がい通りに動かなかったことに驚き、苛立つ。いくら少し気の抜けた状態だったとはいえ、

戦いでは「一瞬」で命運が決まる。

そのことはよく分かっているつもりだったが。

このような少年に気圧されるなど・・・

気を取り直し、更に強い調子で問いかける。

「お前どこから入ってきた!？」

ここは騎士団管理の進入禁止区域だ。

こんなひ弱そうなのが簡単に入り込めるような場所ではない。

「答える!」

ぱちぱちと瞬きがされる。

動きのなかった瞳が揺れて、

今まで澄んでいたのに恐怖の色で染まっている。

「そんなに脅したって答えられないだろう?」

パートナーが茶化すように話しかけてくる。

「だが、ここに居る時点でおかしい!」

「落ち着けてー」

普段は受け流せるパートナーの態度にも、

帰れないことにも苛立っていた。

どれもこれもお前のせいだ、と少年のほうを見やる。

ゆっくりと倒れるのが見えた。

「「?!」」

何かしてしまったかと慌てるが、

気絶したふりをしているだけかもしれない。

警戒を解かぬまま近づく。

少年は短く荒い息を繰り返していた。

「おい」

呼びかけるがピクリとも動かず、額に手をあてると酷く熱かった。
力の抜けた体を此方に預けてくる。

このような間諜や刺客は居ないだろう。

何より殺気というのか、身のこなしと言うのか。

それが素人であることを明示している。

「ちつ・・・しょうがない。持ち帰るぞ。お前運べ。」

「えー荷物が多いし、無理だよー」

確かに見ればパートナーの馬には多くの積荷があった。

「くそっ」

ひざ裏と背中に手を回し、持ち上げる。

少年は驚くほどに軽かった。

しかし、意識を失っても、

未だその体に宿る強い魔力は感じる事ができた。

「一体何をすればこのようになるのだろうか。」

「人間」という種族の器におさまる魔力は限られているはずだ。

「戻るぞ。」

「はいはい」

面倒なものを拾ってしまった

その時には俺にはその程度の認識しかなかった。

2 (後書き)

9 / 25 誤字(?) 訂正

「おかあさん？」

「大丈夫よ、凜。すぐに、すぐにお迎えに来てあげるから」

温かな手が頭を撫でる。

顔を見ようとするとするが、ぼやけていてよく見えない。

「うん！りん、いいこにしてまってる！」

「そうよ、いいこ。」

その人は、そういつて足早に去って行った

「
× ー？」

「
§ >。」

意識が浮上した。

誰かが話している。

「
○、 \$ ー？」

「
ー ー」

額に冷たいものが触れる。

そのことではつきりと目が覚める。
部屋の光が眩しくて、凜は目を瞬かせた。

「%○、@？」

「。#」

「え？ちよっ」

状況確認しようと、力の入らない腕を支えにしながら体を起こすと、

短髪の人と目が合う。

途端、急に腕をつかんでどこかへ連れて行こうとする。

「あっ」

当然、というべきか、立ちくらみがして倒れこんでしまう。

「○ー、」！

凜をベッドに寝かせなおしてくれた人は、
同性の私でも思わず見惚れるほどの美人だった。

・・・もちろん、私よりも体に凹凸があるのはいうまでもない。

「@、」！

女の人が二人に向かって何か叫び、ドアのほうを指さしている。
どうやら、この部屋からでていけといった意味のことを言っている
ようだ。

短髪の人は不機嫌に、足音高くでていったが、
長髪の方はこちらを振り返り、満面の笑みで手を振った。

しかし、この笑みには何故か本能で危険を感じた

日本人の特性というべきか、

つい愛想笑いを浮かべて反射で手を振りかえす。

それをみて、満足そうに去って行った。

「○」

声を掛けられ、女の人の存在を思い出す。

姿をよく見ると、何故か、手が光っている。

「なにそれっ」

思わず逃げ場のないベッドの上で後ずさる。

女の人は眦を下げ、なんだか困った様子だ。

身振り手振りで何かを必死に伝えようとしている。

何をするのか不安は残るが、

身に危険が及ぶようなものでもないようだ。

しかたなく、女の人のほうへと向き直る。

女の人が凜の頭に手を翳す

「んん!？」

頭の中がかきまぜられているような感覚がする。
しかし、不快ではない。

揺らぎがおさまり

「私の言ってることわかる？少年？」

「・・・はい？」

「ごめんねーそうなの、女の子だったのねー」

今さっきのは「魔術」らしい。

「黒魔術」や「錬金術」は地球でもあったが、
実際に成功することはなかったし、

あのように汎用的な使われ方をするものでもない。
森の中でも感じていたが、

どうやらここは地球ではない場所 異世界・・・。

「別にいいですよ・・・」

男に見られるのは慣れていた。が、

「女の子の体とは思えなくてー」

「・・・そうですか。」

面と向かってこうも言われるとへこむ。

女の人 ミーナさんというお医者様兼魔術師らしい の話によると、

ここはこの国の騎士団の本拠地で、

私は「不審者」として運び込まれた。

（王国直轄地の森に厳しい警備の目をかいくぐって居たから）
しかし、誠意を示し、力量があれば入隊も認められる。

ちなみに、入隊以外の道は ない。

ここにこのような形で入った以上、ここからであるのには「騎士」としてか、「死体」としてからしい。

だが、寝食が保障され、稽古もつけてもらえるらしいこの場所は、
此方側の世界には行く当てのない凜には最高の場所だ。

「でも、困ったわねー」

「何がですか？」

「この騎士団には女の子は入れないのよー」

「・・・え」

入る気満々であった凜には寝耳に水である。

それでは目の前のお方はどうなるのだろうか

「・・・じゃミーナさんは「男よ」はい!？」

洗濯や、ベッドメイキングをするメイドさんなどで例外はあるが、

医者も軍医として含まれるため、男でなければなれないそうだ。

「だから男って言ってんじゃないー 何度も言わせないで」

ミーナさんは唇を尖らせる。

こんな表情でも美人だとさまになる

じゃなくて！

「どうしようか・・・」

「そうね・・・」

ミーナさんはうつむくようにして悩んでいる

「男装ね。」

「え？」

「男装よ！そうよ、そうすればいいんだわ！」

悩んでいたから何を言い出すかと思えば・・・

ミーナさんは目を輝かせて私をみる。

「魔術を掛けるとばれるかもしれないから・・・さらし・・・あの二人には・・・」

「み、ミーナさん・・・」

考えてくれるのはうれしいのだが、

自分の世界に籠るのはやめてもらいたい。
遠い目をしてなにか眩いているのは、怖い。

「あら、ごめんなさい」

ミーナが還ってきたようだ。

勢いよく立ち上がり、ごそごそと引き出しの中を漁っていたかと思うと、幅の広い布を取り出す。

「これは・・・さらし。ですか・・・」

凜には必要な気もするが一応受け取っておく。

「ええ。何にもしないのも心細いでしょう?」

「あ、ありがとうございます」

「あー、」

「・・・なんで、ミーナさんはそんなに私によくしてくださるんですか・・・?」

「気に入ったからよー そんなん決まってるじゃない!」

ミーナさんは凜の背中をバシバシと叩く。

女の人に見えるとはいえ、ミーナも男なのだろう。
凜の背中を叩く力は相当なものだ。

「うつ、けほっけほっ」

「あら、ごめんなさい?」

この笑顔とこのセリフ、デジャヴだ・・・。

若干顔を引き攣らせながら 構いませんよ と凜も返す。

「まだもう少し休んでいたほうがいいかもしれないわね」

先ほどのまでの出来事で忘れていたが、

言われてみれば体の芯がまだ重い感じもする。

言葉に甘えて、再びベッドへと横たわる。

途端に睡魔が襲って、瞼が重くなる。

「起きた時につてを紹介するわね」

「は、い・・・」

凜が完全に眠りについたのをみてからミーナは考える。

（あの魔力、尋常な量ではなかった）

運ばれたとき、凜からは通常の人間の10倍以上にもなるのかという魔力が見えていた。

通常、人間はその種族上つけられる魔力量は少なく決まっている。

凜の魔力量は、その此方の世界での人間の量を、遥かに超えていた。

「面白いことに、なりそうね・・・」

魔術師の炫きは誰にも聞かれることなく、

静かに空気へと溶けて行った

「ごめんね、凜ちゃん。起きて」

「んー、あとごぶんー・・・」

居心地の良い場所から引き離そうとする手から、逃れるように寝返りを打つ。

しかし、これは誰の声？

霞がかった思考が違和感を伝える。

ん？ここって

凜はぼつ　と布団をはねのけた。

目に入るのは、いつもの見慣れた自分の部屋。

ではなく、清潔感あふれる白塗りの壁と、ベッド。

「起こしてごめんなさい？

あの人、気の向いた時でもないと『診て』くれないのー」

「ミーナ、さん。ですよね・・・」

そういえば、

と昨日のことを思い出す。

気が付いたら森のような場所にいたこと
そこで剣を向けられたこと

不意に、元の世界と友達のことを思い出し、目頭が熱くなる。もう、二度と会うことも出来ないのだろうか。

でも

ここに来た理由も、どうすればいいのかもわからない。だが泣いて事が変わるわけではない、というのは身に染みている。

「あら、やっぱりもう少し寝ていたほうがよかったかしら」

ミーナが心配している。

昨日は元気に振る舞っていたが、今は疲れているせいか感情が外に漏れていたらしい。

「いいえ、大丈夫です!」

凜は、自分の弱気を吹き飛ばそうとでもするかのようになり、笑って返事をした。

「それで、今からどこにいくんですか?」

二人は部屋を出て、今は廊下を歩いている。

その前に、凜の着替え時に他の医者が入ってきてきそうになったハプニングはあったが

あの時には二人で大慌てで食い止めた。見られでもしたら凜には後がない。

（にしても、この世界の人はみんな大きい）

元の世界では背が高いことを自負していた凜だが、すれ違う人は一様に背が高い。

もちろん、女性も例外ではなく、

先ほどの人は2メートルはあったのではないだろうか。

（食べ物とか、気候の影響なんだろうか）

しかし、背の高さだけではなく『発育』もよいようで、（あんなのが普通なら、少年に見られても仕方ないか）と凜は自分の貧相な体を見下ろしながら一人ごちる。

「んー、そうね・・・あの人のことはなんて言ったらいいのかしら」

「あの人？」

「凜ちゃんは、その腕じゃ『剣』も『弓』もできないでしょう？
だから、『魔術師』になるのがいいと思うの」

なるほど、その通りである。

すれ違う騎士らしき人物の腕は、筋肉がつき、太さは凜の太ももと同じくらいはあった。

きっとこの世界の人間が成長が早いとはいえ、きつと計り知れないほどの努力をしてきたはずだ。

「そうですね。それで、『あの人』のところに行って
何をするんですか？」

「それは、人によって違うから一概には言えないのよ・・・ほら、ここよ」

話しているうちに結構な距離を歩いていた。

着いたのは重厚な木製ドアの部屋。

飾りはなく、簡素ではあるが位の高い人物の部屋だと思われた。

「頑張つてね」

扉が開く。

「誰じゃ？」

振り返った人物は、盲目の老人だった。
気が付けば、扉はすでに閉じられていた。

「篠原凜、と申します・・・」

『気品』とでもいうのだろうか、老人から滲み出てくるものに圧倒される。

内装を確認する余裕さえなく、

震える声で名前を告げるので精一杯だった。

「こっちに来て座るがいい」

言われるままに椅子に座る。

視界には老人しか入ってこない。

「ミーナから話は聞いておるかね？」

「人によって違う、とだけ。」

「ふむ。そうじゃの。君にはこれがいいのではないか」

差し出されたのは手のひらに載るほどの水晶玉のようなものであった。

部屋から差し込む光によって、何色にも変わるそれに、凧は思わずほう、とため息をつく。

「これを手の上にのせて・・・」

「目を閉じて、その珠に想いを籠めてみなさい」

ころんと手の上に乗せられる。

見た目に反し、ずっしりとした重さを手に伝えてくる。

圧倒され、緊張しながらも、目を閉じて手のひらの珠に集中する。

「おお・・・これは・・・」

老人の声に目を開けると、先ほどまで部屋には居なかった人々が凧の周囲にはほほ笑みながら佇んでいる。

その全員が凧を慈愛に満ちた目で見つめ、不思議な動作で踊りだす。薄い衣を翻し、舞う。舞う・・・

手元の珠を見ると、強い光を発して輝いていた。

その光景に混乱し、思わず珠を取り落す。

床にことんと落ちる音と共に光と人々は名残惜しそうに消えていった。

「あの、今は・・・？」

「精霊たちじゃ」

老人はよほど感動したのか、見開かれた目から雫を溢す。
そのまま老人は静かに語りだす。

老人の話によれば、

魔力の強さ
凜の珠の光の強さは王国お抱えの魔術師にも匹敵するらしい。
精霊術に対する力
現れた精霊の数は

これほどまでに多くの精霊をみたのは久しぶりだとか。

現れた精霊は皆、王レベルのものばかりであつたのだが、
凜はそれを知る由もない。

魔術と精霊術は今とは同一視されているが、本来は個別のものであり、
両方の均衡が保たれていればいるほど力の強い魔術師になれると
のこと。

「君は、きっと、きっと良い魔術師になれる」

老人は凜の手を握り、涙を流しながらそう繰り返す。

「・・・これで、わしの役割はおしまいじゃ」

「自分の魔力について聞かれたら、これをおみせなさい」

老人が手を振ると何もない場所からペンダントがでてくる。

「きれい・・・」

思わずそんな言葉が凜の口から零れる。

それは銀の鎖に石のペンダントトップが一つという
シンプルなものであったが、石の色に目を引かれた。
それは、先ほどの水晶玉と似ていて、
何色ともいえる不思議な色合いをしていた。

首にかけて、目の前ににかざせば、揺れてきらりと光る。

「ミーナにも宜しく頼むぞ」

老人は扉のほうを指しながら言う。
時間だということなのであろう。

凜は出て行こうとし、立ち止まって尋ねた。

「あの、お名前を伺っても？」

「そうじゃな・・・わしは『守り人』とだけ呼ばれておる」

「・・・ありがとうございます」

部屋を出ていくときには、凜の目はこれからの希望を含んで、
強く輝いていた。

ミーナさんは扉のすぐ傍で待っていてくれた。
凜の姿をみつけ、優雅にほほ笑む。

が、胸元のペンダントに目線が行き、僅かに柳眉がよせられる。

「それはしまっておいた方がいいわ、リン」

「は、はい」

一体これがどんな意味を持つというのであろうか。
疑問に思いながらもシャツの中へとしまいこむ。

ちなみに今の凜の格好は男子の制服のようなものだ。

白いワイシャツに、黒のズボン。

しかし、革の編み上げブーツであることと、生地が上質とうかがい
知れるものであることが、制服とは一線を画するものであることを
示していた。

し、視線が痛い

『守り人』のところへ行き、緊張が和いで、
周囲を落ち着いて見る余裕ができていた。

だが、それと同時に周りから向けられる視線にも気づくこととなる。

すれ違うたび、人々 特に、何故か女性から 強い視線が
向けられるのだ。

「ミ、ミーナさん、早く戻りましょう」

高校の女の子たちからの視線には慣れていたが、ここでの美形な人々に、

物珍しそうな目で眺められると落ち着かなくなるのだ。

第一、自分のような平凡を地でいくようなのが、このような場には似つかわしくない気がする。

ミーナは、隣で焦ったように速足で歩く隣の少女

否、少年を見やり、小さくため息をついた。

凜は人々が物珍しさから自分を見ているのだと思っているのだろうが、

それは違う。

凜は実際目をひく。

しかし、それはいい意味でだ。

しみひとつない陶器のような肌、

短くとも絹のようなさわり心地を連想させる髪、けぶるような瞳。

小さく整った顔に、華奢な長い手足。

しかし、一番目を引くのはその目だった。

少し切れ長な、しかし大きな瞳はこの国では珍しい漆黒で、性別に関わらず人を引き付ける強さと美しさを秘めていた。

周囲の人間が放心状態に落ちるのをみて、ミーナはしばしの間楽しんだ。

（だが、）

とミーナは笑みを消し、真剣に考える。

凜が守り人からもらった石は、貴水晶だ。

見たときには思わず息を呑んだ。

貴水晶は「神の涙」とも呼ばれるほど希少で、

魔術師の力を表す石としては最高ランクにあたる。

貴水晶を持てるのは、この魔術が盛んなこの国でも
10人に満たないのではないだろうか。

この細身な少年^{リン}に待ち受ける困難を思い、ミーナは再びため息をついた。

でも、今は私ができることをしてあげたい

そんな思いで少年の後を追った。

「本当はね、印や呪文を覚えて使うものなのー」

「やっぱり・・・」

（どの世界でも、やはり勉強や、努力は必要なのか）

「でもね、あなたの魔力なら大丈夫だと思うわ」

今二人はミーナの執務室におり、凜はミーナから魔術の手ほどきを受けていた。

勿論、元の世界では魔術は小説やゲームの中のことであつたため、凜は興味津々である。

「魔術は『想う』ことが大事なのー」

「私がやってみるわね」

ミーナが何かを包み込むようにして両手を丸める。

「わあ・・・」

途端に温かなやわらかい光が手からもれだす。

「やってみて？」

凜も、同じように手をだし、目を瞑って思いえがく。

手から光が溢れ、優しく二人を包み込んでいる情景を

目を開くと、球状になった光が二人を包んでいた。

「「！！」」

凜だけではなく、ミーナも驚きを隠せなかった。

（貴水晶をもらっただけのことはある。か・・・）

「リン、もういいわよ、術をやめて」

術を止める時には、止まるように願うと先ほど教わった。

光を散らすように手を振ると静かに、流れるように消えて行った。

「ふう……」

初めて使ったこともあり、緊張していたのか肩の力が抜ける。
しかし、倦怠感や疲労感と言った類のものは感じられない。

「……リン」

そのまま騎士団や、魔術についての基礎事項を教わっていたが、
今までのからかうような表情はなく、改まった様子のミーナに、
凜も思わず背筋を伸ばして対峙する。

「あなたに、私が教えられることはもうないわ」

「え……でも……」

そうはいつでも、凜はこの世界の初心者だ。

それに、我儘だとはわかってはいるが、まだまだミーナに傍にいて欲
しかった。

「基礎を確認しようと思ったのだけれど、必要なかったわね」

「大丈夫。これから入る騎士団でみっちり教^{しゅく}えてもらえるわ」

不安そうな凜にウィンクがとぶ。

「そう、ですか……」

「それじゃ、早速あのおやじのところに行きましょ！」

「お、おやじ！？」

「そう。あんなのにリンを任せたくはないんだけど「誰がおやじだ」

「ひやつ！？」

「あらー手間が省けたわ」

気配を消していたのか、凜が気づかぬうちに扉の内側には一人の男性がもたれかかっていた。

手は節くれだち、鷹のような鋭い相貌を持ち、本当に・・・

「・・・魔術者なんですか？」

言った瞬間にぎろりと睨まれ、口を手で押さえるが、時すでに遅し。標的は凜へと変わっていた。

「なんだ、こいつは」

「ねーリンもそう思うわよねー」

「こんなんだけど、魔術師団の団長なのー」

睨まれてもミーナは平然として凜に話しかけてくる。

その精神力は見習いたいのが、空気を読むということをミーナは知らないのだろうか。

日本人の凜としては、ぜひその技術の習得をお勧めしたいところである。

「だっ、だんちょー・・・」

騎士団の中の称号や、仕組みについては先ほど軽く教わっていた。団長といえば、騎士団の各部門での一番の「お偉いさん」である。

すなわち、この国でそれに一番精通している人間
畏怖の目で、姿をもう一度確認しようとする。
が、未だ睨まれていることに気づき、慌てて視線を戻す。

「この子はねーリン。」

新しく騎士団に入れてもらおうと思つてー」

「・・・力は。」

「この子の石は・・・」

「貴水晶よ。」

「なにっ」

ミーナがその単語を口にした瞬間、団長が目の前に迫っていた。
威圧感に、あわあわと狼狽えてしまう。

「みせろ」

「だめよー怯えてるじゃない」

その言葉に巨軀が離れてゆき、凜はほつとした。
敵意を向けられているわけではないのだが、圧迫感が大きすぎる。

そのまま二人で何か話し込んでいたが、どうやら入隊を認めて貰えたようだ。

ミーナは上機嫌で、団長は不機嫌を隠そうともせずに凜のほうを向く。

「・・・ふん。まあ、力に関係ない。
遠慮なく指導をつけさせてもらう。」

「あ、お願いします！」

自分に向けて言われたらしい言葉にぴよこんと立ち上がり、お辞儀する。

「・・・ついてこい。」

「ちょ、ちょっと待ってください」

不機嫌をあらわにする団長におびえながらも、凜はミーナに向き直る。

「あの、本当に、ありがとうございました。
ご迷惑をおかけしました」

ミーナはこちらで一番お世話になった。

離れるのには不安も残るが、遅かれ早かれ別れなければならなかったのだ。

「いいのよ。あの人、不器用だけどいい人だから。心配しないで」
と、ミーナは可笑しそうに笑う。

早くしろ。と団長が苛立っている。

いってらっしゃい。とミーナが笑む。

「はい！」

凜は、振り返らずに、部屋を後にした

5 (後書き)

団長〃モブキャラ(仮)

団長に連れられて着いた場所は、ドームのような、巨大な空間だった。

よくみれば、各部門の騎士たちが鍛錬しやすいように薄い透明な膜のようなもので三つに区切られていることがわかる。

団長が何か合図をしたのか、魔術師たちがざつと壁際による。

「俺のやるとおりにしろ。」

いうなり、団長は何かをぶつぶつとつぶやきだす。

すると、手の中に炎の塊が形成されていった。

手を振れば、炎は前方へと飛んでいく。

行き先を目で追った凜は、遠くにある、小さな的にそれが当たるのに目を瞠った。

的は100メートル以上は離れているのではないだろうか、周りで多くの術者が見ている中、これを成功させなければならぬのかと思うと、気が滅入る。

「やってみる。」

どのみち通らなければいけない道のようにだ。

（ならば早く終わらせてしまった方が楽だ）

凜は覚悟を決め、一歩前へと踏み出した

団長は最初たかをくくっていた。

魔術には、確かに力の大きさはものをいう。

だが、それ以上にはつきりと「想う」ことと、それを助ける集中力が大切であった。

新人の最初の訓練は、このような衆人環視の場で行うのが定例であった。

多くの人の目とプレッシャーにさらされながら、どれだけ実力を発揮できるか

殆どの新人はその重圧感に押しつぶされ、呪文の途中でどもったり、集中できずに失敗する。

（この貴水晶だとかいう坊ちゃんも同じだろう）

そう、思っていた。

凜が、呪文も唱えず素早く、炎を的へと寸分たがわず当てるまでは

凜は、成功したことに一息つく。

ミーナと練習したのは光を灯すだけだったので、
このように大がかりな魔術を使うのは初めてであった。

団長のほうをみあげる。

目は、僅かに驚きのためか見開かれていたが、すぐにそれは何事もなかったのように無表情になる。

「次だ。」

それから後も、凜は団長の後に続いて20ほど魔術を使ってみせた。

「・・・ここで待っている。」

凜が自分の周りに張り巡らせていた防御膜を取り除くのと同時に、団長は足早にドームをでていく。

凜は呆氣にとられるが、魔術を多く使い、少なからず疲れていたため、

どこか休めるような場所はないかと周囲を見渡す。

視線を感じ、そちらに目をやると。

（う、わ・・・）

術師たちから好奇心まるだしの視線が向けられていた。

中には嫉妬や戸惑い、疑惑などのものも交じっているが、それも覆い尽くしている。

それも当然のことである。

魔術を使用する際には通常、精霊にはつきりと意志を伝え、かつイメージを明確にするため、詠唱を用いる。

無詠唱も、あることはある。

魔術師の中の二割ほどはでき、それほど珍しいものでもないと言える。

だが、無詠唱で想像と寸分違わぬ魔術を使い、さらにそれを何回も連続でできる人間となればそれは限られてくる。

更に、あれほど魔術を使っているにも関わらず、凜からの魔力の放出は異常なまでに少なかった。

どれだけ制御が上手いとは言っても、最低でもその三倍は出る。

そんな規格外の新入りの術者に、

術師たちが知識欲を刺激されたのは致し方のないことだったのだ。

勿論そのようなことは知らない凜は思わず身じろぎ、この場から早く離れたいと切望した。

（だが、この人たちにもこれからお世話になる。）

視線はこわかったが、親睦は深めておくに越したことはない、と思い直し、近づいてゆく。

「あのー・・・」

術者たちはお互いを見合い、意を決したかのように一人の若い術者が進み出た。

「一つ、聞いてもいいか？」

「ええ、構いませんよ」

好印象を与えておこうと、凜はふわりとほほ笑む。

それはさながら荒野に一輪の可憐な花が咲いたかのようで、

思わず、術者たちはその笑顔に見惚れ、

(((((いやいやいや、俺たちにそんな趣味はない！)))

と全力で否定した。

前に出ていた青年は一番その破壊力の影響を受けたようで、
凜がしばらく呼びかけてやっと我に返った。

「さっき、高等魔術を無詠唱でやってたよな」

「こうとうまじゅつ？むえいしょう？」

どちらもミーナからは聞いていない言葉であり、

「すみません、それについて詳しく説明してもらっても・・・？」

「そ、それはだな」その説明なら俺のほうが上手い」

「いや、高等魔術というのはだな」違うぞお前！」

凜が知らないことで緊張を解いたのか、

話しかけたくてうずうずしていた術師たちは一斉に凜の周りに集まってくる。

集まる術師の中で最初は上手く立ち回っていたが、
疲労は蓄積されてゆき、蹴躓いて転んでしまう。

その弾みにペンダントが服から転がり落ち、それをみた術者が瞠目する。

「き、きずいしょう・・・」

「おい、お前どうした。って・・・ 貴水晶!?!?!?」

「「「「「え!?!?!?!?!」

それを耳にした術者たちが一斉に凜の周りから遠のく。

「こ、これがどうかしたんですか」

凜は困惑し、ペンダントを透かし見た。

先ほどまでの熱気を一気に冷ますほどの効果がこの石にはあるのか。
凜は小首をかしげる。

・・・と、

「おい、行くぞ」

「「「「「団長!?!?!?!」

団長は凜を立たせて、腕を掴み、出口へと引きずっていく。

凜は慌てて術者たちに一礼し、嵐のように二人は鍛錬場から去って行った。

「なんなんだ、あの坊主・・・」

一人の呟きに、全員が賛同する。

「団長が初期訓練の準備をしろっつーから何事かと思えば・・・」

「しかも団長直々に規範となり・・・」

「高等魔術を無詠唱でやって見せ・・・」

「終いには石が貴水晶だって・・・？」

「・・・はあ・・・」

いきなりあらわれた規格外な美しい少年の正体について、術者たちは何日も悩まされることになったという。

団長に引きずるようにして連れてこられたのは、団長の執務室のようだ。

机の上には乱雑に書類が積み重なり、ところどころに殴り書きのよなメモが見える。

掃除は行き届いているが、これでは仕事もしにくいだろうに。

「騎士の登録をする。」

団長がごそごそと引き出しの中を漁り、一枚の紙を取り出した。引き出しの中もなんだかごちゃごちゃしている。

「書け。」

ペンと共に出される。

幸い、ミーナがかけていた魔術は話し言葉だけでなく、文字にも効果があったようだ。

みたこともない文字の意味がすらすらと頭に入ってくる。

近くにあった椅子を台にして書きだす。

馴れていない万年筆のためインクがところどころ滲んでいるが、それくらいは許されるはずだ。

項目は、「名前」「年齢」など10ほどであった。

途中に「性別：男性」と書いてあるのをみつけ、僅かに動揺する。

覚悟はしていたのだ。

周りからは、男として見られる事になるのは。

ただ、そう思っていたのと、こう文書にして、文字にして目の前に出されるのは、あまりにも違いすぎた。

動揺を内面に押し隠し、項目を埋めていく。

最後の項目で筆が止まる。

翻訳魔法のおかげで言葉は伝わってくるが、意味がよく理解できない。

「精霊獣」とはなんなのか。

「あの、これって・・・」

「まだ居ないのか？」

紙を覗き込み、どこで止まっているのか確認した団長の 無表情の中に驚きの色がみえる。

その反応を見る限り、魔術者には居て当然のようだ。

「は、はい・・・」

団長の話をまとめれば、

精霊獣は、精霊が獣の形に変化したものである。

通常は幼少時に魔力があるとわかった時点で、知り合いの術師か、魔術学校（小学校のようなものらしい）の先生の監督のもと、召喚陣を用い、契約を行う。

また、術師の力の大きさによって精霊の強さが決定される。

術師の力の大きさは一般的には生涯変わることはないため、契約した精霊獣は、生涯術者に付き添う。

とのこと。

「まだ、契約していなかったのか。」

ふむ。

と、団長は暫く考え込むと、

「ついでだ、この機会に行ってしまうおう」

「え!？」

凜は驚く。

先ほど、「生涯付き添う」と言うてはいなかったか、そんなに簡単に、気軽に行ってしまうてよいものなのであるうか。

悩む凜を尻目に、団長は黙々と召喚陣を床に描いてゆく。

「中に入れ。」

「は、はい!」

威厳に満ちた声に反射的に従った。

「繰り返せ。レッタ・フォル^{召喚}」

「れった、ふおる?」

その瞬間、目の前が暗くなる。

眩暈がして、思わずその場に座り込んだ。

（なんなんだよ、これ・・・！）

眩暈がおさまり、ゆっくりと目を開ければ、そこには、白い空間が広がっていた。

とりあえず、状況確認もしなければならない。
そんな思いで立ち上がり、周りをきょときょと見渡す。

周囲には何もなく、延々と白が広がるだけだ。

前に進んでみても、景色は変わることはない。

「・・・誰か、でてこいよ・・・」

思わずため息とともにそんな言葉が零れた。

「汝、我を呼ぶか？」

「え？」

周りを見渡しても、空間に変化はない。

「汝、我を呼ぶか？」

再び、声が聞こえる。

重厚で、腹の底に響くような声。

「あの、あなたは・・・？」

「我、精霊なり。汝、我の力を欲するか？」

一瞬戸惑う。

しかし、これが団長の言っていた

「契約」かもしれないことに気が付き、声に応える。

「はい。私に、力を貸してくれますか？」

契約の方法など知らなかった。

ただただ、この響いてくる声に

この身を預けたいと心が欲していた。

「承知。名を授けよ。」

「メイシエス。」

無意識のうちに、その名が口から零れた。

「貴方の名前は、メイシエス。」

「承知。我、此处に汝と約束を結ぶ。」

かあつと胸元が熱くなる。

前を見れば、大きな黒豹がこちらをむいて座っていた。

不思議と恐怖は感じなかった。

近づいて、鼻面に触れる。

瞬間、視界が暗転した。

7（後書き）

アドバイスいただきました
有難や、有難や。

8 (前書き)

前回の続きです

再び目を開けた時には、もと居た執務室の床にへたり込んでいた。

団長が眉根をよせてこちらを向いている。

失敗したのか

不安に襲われ、体の力が抜けてゆく。
しかし、隣の黒豹が頭をつつき、団長の終わったぞという言葉で召喚が成功したことを悟る。

「良かった・・・」

子供でも成功するような召喚に失敗するなら、
もしかしたら騎士団への受け入れを取り消されるかもしれない
と危惧していたのだ。

「大丈夫か、リン」

あの重厚な声がきこえる。

思わず豹の目を覗き込めば、金色の瞳が光る。

「君がしゃべってるの・・・？」

「他に誰がおる」

ふんと偉そうに鼻を鳴らす姿に頬が緩んだ。

「お主と我は喋らずとも、離れていても意思疎通はできる」

「もつとも、それ以外の奴は言葉は通じんがな」

とメイシエスが言う。

（ねえ、めい「真名で呼ぶな」・・・え？）

「真名で呼んではならぬ」

理由は分からなかったが、
メイシエスがそう言うのならそのようなものなのだろう
と、解釈する。

（うーん・・・じゃあ、シエスで。）

頭の中でそう答えれば、気に入ったのか
尻尾がぶんぶん揺れるのがみえて、
思わず首に飛びつく。

「か、かわいい！」

凜は動物好きだ。それもバカがつくほどに。

元の世界でもそこらにいる猫だの犬だのに懐かれては
頬をほころばせる姿が目撃されていた。

しかし、「凜様、ギャップも素敵だわ・・・」と
女子たちに密かに観察されていたことは、
凜は知らない。

「う、うむ。・・・さつきからその男が此方を見ておる。
居心地が悪うてならぬ」

（あ、団長のこと忘れてた）

立ち上がり、少し恥ずかしく思いながら団長に向き直る。

若干顔色が悪い気がするが、しっかりと立っているのを見る限り、
大丈夫なのだろう。

「・・・大きいな。」

横を見ると、確かにシエスは、大きい。

凜が立ち上がったても頭は凜の腰程度である。

「それでは目立つ。小さくなるよう命じろ。」

「命ずる」という言葉に違和感を感じながらも、
シエスに語りかける。

（シエス、もう少し小さくなることはできない？）

「何故だ。目立てば我がリンを守っていることを周囲に知らしめる
ことができる。」

シエスは不満げだ。

確かに、体を小さくするのは窮屈そうではある。

しかし、

（お願いっ。人間もいろいろと大変なんだよ、きっと。）
今後の平穩のためにも、ここは譲れない。

「お主はまるで自分が人間でないかのような話し方をするな」

シエスは苦笑し、体をみるみる小さくさせてゆく。

変化が終わったとき、そこにいたのは
ふわふわの毛に包まれた子豹だった。

リンのほうを見上げ、ことんと首をかしげる。

「どうじゃ？」

（かわいいすぎるよっ）

抱き込んで撫でたい衝動を抑える。

「それで構わん。」

団長が紙の最後の欄にさらさらと書きこんでゆく。
最後に判子を捺すと、
紙は二つの銀の輪に変化した。

よく見ると、

一つはシエスの瞳のような金色の、
もう一つは凜の瞳と同じ漆黒の石が一つつつ飾られている。

「金のほうを凜、黒のほうを召喚獣につける」

輪はするつと腕に通った。

シエスのほうは首輪にするのかな、と見て、

「これ、通りますか？」

輪は凜の拳が入る程度で、シェスの頭が入るとは到底思えない。

「頭にのせてみる」

訝しく思いつつも載せる。

すると、輪は広がり・・・根元の位置でちょうど良い大きさになって縮んだ。

「それには魔術がかかっている。

大きくなっても邪魔になることはない」

「なお、それは身分証明書の役割も果たす。
気をつける。」

ほう、と感嘆しつつも、

ここが異世界だということを再認識させられる。

「とりあえず、今日はもう休め。
案内を呼ぶ。」

手を叩くと、執事のような人がやってくる。

「お呼びでしょうか」

「こいつをあいてる部屋に案内してくれ」

執事さんは一度は驚いたように見えたが、
「承りました」と一礼する。

「こちらです」

「はい！あ、お世話になりました」
凜も団長に礼をする。

さつさと行け

という言葉に見送られ、部屋をでる。

途端、腹の虫が存在感を主張する。

忙しい中で空腹のことなど忘れていた。

よく考えれば昨日の昼から何も食べていないのだ。

恥ずかしさで顔が赤くなるが、

執事さんに大丈夫だとでもいうかのように肩をたたかれる。

部屋にはすぐについた。

執事さんがサンドイッチのような軽食を持ってきてくれる。

「御用がありましたらこのベルをならしてください」

と言って、部屋から出て行った。

「はぁー・・・」

軽食を食べ終わり、

ベッドに寝転んで長い溜息をつく。

「どうした」

シエスが尋ねてくる。

「なんか、いろいろあつたなあと思つて。」

「気づいたら森に居て、剣を向けられて、守り人に会つて、魔法を使つて・・・」

思わず、涙が一筋零れた。

「だ、だめだね、こんな弱気でいちゃ」

ごしごしと頬をこすろうとすると、
シエスがベッドに飛び乗り、それをとめた。

「我の前では弱気でもよい。
存分に泣け。」

「シエス・・・」

その夜、凜はシエスを抱いて、
泣きはらした目を静かに閉じた。

9（前書き）

ちよつと今回は説明チックな部分が多いです。
設定を作りこむのが、自分苦手なことに今更気づきました・・・

窓から差し込む光で目が覚めた。

凜はベッドから下りて伸びをする。

付き添うようにシエスも下りて同じように伸びをするのを
視界の端でとらえる。

明るくなってから部屋をよく見渡せば、

そこは某高級ホテルのスイートルームとでも
見紛うような高級感溢れる空間であつた。

今踏みしめているカーペットはフカフカで、

足の下に敷いていることが思わず申し訳なくなる。

家具には繊細なレリーフが掘り込まれ、

丁寧な手作業を施している様子を思い浮かべることができた。

半ば興奮気味に部屋の装飾や家具を見て回っていると、
こんこんとノックの音が聞こえる。

「はい」

「おはようございます。お目覚めはいかがですか？」

入ってきたのは、昨日もお世話になった執事さんである。

よく見れば、この初老の執事さんも「ロマンスグレー」といった感
じで、

若いころにはさぞかしモテたのではないか、と凜は想像する。

「とても良かったです！ありがとうございます」

凜はほほ笑んでお辞儀をした。

もと居た世界でも受けられないような待遇である。
不満など、あるはずはない。

「それはようございました。」

嬉しそうな凜を目にし、執事も頬を綻ばせる。

（この部屋は客間の中でもあまり良いものではないが、
客に喜んでいただけたならそのようなことは関係がない）

と、当初の目的を思い出し、凜に問いかける。

「ところで、湯あみと食事とどちらを先になさいますか？」

「お風呂と、ご飯ですか？」

そうですね、ではお風呂を先に・・・」

「承知いたしました。ではメイドを呼びましょう」

「ま、待ってください！大丈夫です一人で入れます呼ばなくて構いません！」

凜は慌てた。

この服の下にはさらしをまいているし、
裸で風呂に入れば性別を偽っていることなど
すぐにはれてしまうだろう。

「??? 承知いたしました。
それでは、着替えを用意しておきます。」

息を荒くしながら一人で入ると息巻く客人に疑問を抱きながら執事は部屋をでた。

「あ、危ない」

思わずベッドに身を投げ出した。

「何がだ？」

先ほどまでの浮かれた様子とは違う凜の様子にシェスが寄ってくる。

「・・・シェスは私が女だってこと」知っておる」
「・・・え。」

凜はぱつと身をおこす。

そ、そんなに隠せてなかったか、もう知られているかもしれないと不安そうに瞳を揺らす凜に、

「我ら精霊にはその者の本質が見えるゆえ。
心配はいらぬ。そのようには人間はリンを見ぬ。」

シェスとしては安心させようとして言ってくれたのであろう。
しかし、男装が成功しているという安心感は何れられたが、
残り僅かな凜の女としての矜持が傷ついたのは言ってもない。

「そ、そう・・・ありがとう・・・」

僅かに気落ちしているらしい凜の様子をシェスは不思議に思う。

「??? とりあえず、湯あみに行かねばならぬのではないか?
早う行かねば意味がない」

「そうだった!」

凜は慌てて先ほど見つけていた風呂場へと飛び込む。

幸い、シャワーや石鹸などの使い方に差異はないようだ。

体を流す水が見る間に濁ってゆくのをみて
自分がいままでどれ程汚れていたのか自覚した。

もともと綺麗好きな性質である。

既に湯船につかっていたシェスに心配されるほど肌をこすり、
気の行くまで頭を洗い、

「ふうー・・・」

異世界に来て、やはり日本人である。
お風呂や、温泉という類には弱いのだ。

乳白色の湯を眺めながら、ふと思いついた疑問を口にする。

「シェスってまさか女の子だよな?」

「何をいうておる。我はれっきとした男ぞ
信じぬのならここで人型になっても」

「でてけーーーー！！！！」

一人と一匹は早々と風呂を出ていた。

シエスの性別詐称疑惑（？）が露見し、
凜がシエスを風呂場から追い出してしまい、
このような状況では落ち着かないと、
後を追うように凜もあがってしまったためである。

そういえば、さつき耳慣れぬ言葉を聞いた気が

「シエス、さつき人型って言った？」

「言ったぞ。我は高貴な精霊故。」

「高貴・・・？」

首をかしげる凜にこれしきのことも知らぬのか、と
シエスは説明する。

「精霊にもいろいろとおる。」

その中でも大きく三つにわかれておる。

一番位の低いもの 低級精霊 は、厄介だな。

力はそれなりにあるのだが、気の赴くままに動くために
しばしば術師によって精霊界に強制的に戻されることもある。

次 中級精霊 はまだよいほうか？
精霊獣になると、精霊の時に持つておった力が半減するのよ。
ただ、術師の言うことは聞くな。

最後が高級精霊よ。

我の様に自我もある。力も変わらぬし、
稀に増えることもあるらしい。

だが、もう一つ上にあつてな・・・」

もったいぶったようなシエスに凜は我慢できずに
続きをせつついた。

「その、一つ上が？」

「我らのような精霊よ。

契約も他のものは喚ばれたならするほかないが、
気に入ったものとだけするのよ。

力も高級のなぞよりもあつてな、10倍はくだらんだろう。
我らのみ、精霊獣になつても人型をとることができる。
ただし、これはよっぽど気に入ったものにしかみせぬ。」

どうだと言わんばかりの説明に、凜は素直に感心した。

「へえー、シエスはすごいんだな」

力も人型特典とか面白いと凜はしきりに感心している。

お前のことを気に入つておると言外に含めた説明に全く気付かない
凜に、

シエスは密かにため息をついた。

その時、こんこん と本日二度目のノックが聞こえる。

さきほどの執事さんが来たのかと、
凜は返事をし、扉を開けた

9（後書き）

此処まで読んでくださってありがとうございます！

10（前書き）

少し更新遅くなりました
ついに10話まで来ました！
みなさんありがとうございます！

入ってきたのは、執事さんではなく

「お邪魔しまーす」

「・・・」

「あの時の・・・？」

「覚えてくれたんだー」

森で出会った二人だった。

あの時は、確か意識を失って倒れてしまった。

ということは、恐らくこの二人が此処まで運んでくれたのだろう。

「先日はお世話になりました。」

二人を椅子に案内し、凜は礼を言う。

もし、違ったのだとしてもこの二人に迷惑をかけたのは間違いないだろう。

「全然いいよー」

と、長髪の方はひらひらと手を振る。

それを不機嫌そうにみやり、口を開いたのは短髪の人だ。

「俺たちが此処に来たのは、魔術師団長から
お前をパーティーの術師に推薦されたからだ」

「え・・・」

凜は戸惑う。

パーティーのことも、仕組みのことも聞いていた。

しかし、自分で言うのは悲しいが、

こんな　どの馬の骨ともわからぬようなものを実践に出してよいの
だろうか。

「でも、自分はまだ初心者で　」

「大丈夫大丈夫」

俺ら結構強いほうでさー、

一人くらいのカバーならどうにかなると思うんだよね」

「と、いうことで自己紹介

俺が「弓」のケイト・ファンナル・ド・ラメリア。

ケイトって呼んでよ。

で、こっちの仏頂面してんのが　」

「・・・ルミル・ラ・フェール・レイチェル」

「で、「剣」。かなり強いんだよー

レイって呼んであげて。

で、名前をきいても？」

「あ、はい。篠原凜です」

「リン君か。珍しい響きだね。

で、これが証明書なんだけど　」

凜が勢いに押され、困惑する間にもことはどんどんと進んでゆく。

口を挿んでも、長髪の人 基、ケイト は聞いてくれないだろう。しょうがなく、二人を観察しだす。

まず。二人とも俗に言われる「美形」という部類に入る。

ケイトのほうはなんだか貴族という感じだ。

細身ではあるが、騎士であるからには
きつと体も鍛えてはあるのだろう。

肌も抜けるように白く、白銀の髪もさらさらで、
女性が羨むことは間違いない。

目は常に細められていて、人当たりの良い笑みを浮かべている。

だが、柔らかかではあるが隙のない物腰、
少し不自然な 軽薄なしゃべり方が
この人間の本性はほかにあることを示している。

一方、レイのほうはまさに騎士という感じだ。

肌は浅黒く焼けて、灰海色の瞳は怜悯な光を発している。

体も筋肉がついて引き締まっており、
「剣」だということも納得できる。

（こいつののは「ワイルド」と言っただろうか）

と見てみると、視線を感じたのかレイが顔を上げる。

目があつて居心地が悪くなるが、直ぐにそらされた。

内心では少しむっとした。

初対面 でもないが、微笑む位のことはしてくれてもよいのではないか。

しかし、先ほどのケイトの紹介の仕方を見る限り、これが彼なりの対人法なのかもしれない。と自分を納得させる。

「　　ということ、これから宜しく！」

説明が終わつたらしい。

手を差し出され、一瞬何をするのかわからなかったが直ぐに握手を求められているのだと理解する。

「よ、宜しくお願いします」

「じゃ、俺らの部屋に案内するよ」

「え？相部屋なんですか？」

当然別々だと思つていた凜は聞き返してしまう。

「パーティーは一つの部屋に寝るんだよー
僕たちと一緒にの部屋はいやかい、少年」

一気に悲しそうになるケイト。

「そんなことはないです！」

こんなことでこれから長く付き合うことになる人と
不仲になってしまつては困る。

そんな思いがこもつたからか少し叫ぶようになってしまった。

「あははは。希望してくれてうれしいよ。

リン君の荷物は？」

「あ、あのカバンです」

指さす一つの小さな旅行鞆をみたケイトが

驚いたように目を見開く。

それも当たり前だろう。

貴族の子であれば、時には馬車一台分も持っていることもあるし、
平民の子でも最低大きな旅行鞆二つくらいはあるものだ。

凜の荷物はあまりにも少なすぎた。

凜としては、革でできたこのバッグの中身は多いくらいだった。

「貴殿の着ていた服は、ミーナに預ける

この鞆は活用していただきたい」

というメモと共に机のそばに置かれていたこのバッグには

服、革製の手袋から、

ありとあらゆる必要と思われるものが詰まっていた。

こんなによくしてもらつていいのだろうか、と凜は逡巡している。

この待遇が、将来有望な、

身寄りのない魔術師のためであるということとは、

もちろん凜は知らない。

「行こうではないか、リン」

シエスが突然ひざの上に飛び乗ってきた。
困惑する凜をみかねてきてくれたのだろうか。

（シエス！・・・でも、大丈夫か？
こんなのが戦えるだろうか・・・）

自分の戦いとは無縁だった貧弱な体躯を見、
凜はシエスに問う。

「我がおる。危険な時は助けてやるゆえ。」

自信満々でこちらをみつめるシエスに心が凪いだ。

確かな理由なかったけれど、シエスは自分のことを裏切らない。
そんな気がした。

「・・・はい。行きましょう。」

シエスと話し合うのを待っていていたのか、
ケイトが此方をにこにこ見つめていた。

「うん。行こうか。」

立ち上がり、短い間ではあったがお世話になった部屋をでる。

鞆を持ち、シエスをつれてそのまま歩き出そうとすると
レイが怒ったように喋ってきた。

「精霊獣は「しばって」おかなくていいのか」

「縛る」・・・？何故ですか？」

「何故かだと、暴走して被害を与えたらどうする」

つつかかるレイをケイトが宥める。

「その精霊獣は「黄金」色だから心配ないよ
さっき話していたの見なかったの？」

「ちっ・・・」

ケイトに言われ、レイは不機嫌そうに速足で先に行ってしまった。

「何かまずいことでも言いましたか・・・？」

「あいつはいつつもあんな感じだからさ。
気にしなくていいよ」

早くも暗雲が立ち込めた騎士生活に、
凜は不安を覚えながらも廊下を歩き続けた。

11（前書き）

ケイト君視点です

この前の話でやっと副主人公が出せて良かった・・・

お、お気に入り登録の数が素晴らしいことになっております！
みなさん有難う御座います・・・（泣

魔術師団長からパーティーの術師がみつかったという知らせを受けた時には、
何かの冗談かと思った。

この時期には新入りは既にパーティーはきまっているはずだし、
僕たちのレベルに会うような術師が
こんな時期外れに入ってくるのはタイミングが良すぎる。

でも、団長が言うのだから間違いはないのだろう。

術師がいると言われた部屋は客間だった。
客間の中では一番質素な部屋ではあるが、騎士候補が通される部屋
ではない。

誰か有力者の斡旋があったのだろうか。

扉を開けて出てきたのは、
まだ年端もいかぬ小柄な少年だった。

自分で開けたくせに驚いている。
だれかほかの人間を待っていたのだろうか。

そういえば、この顔どこかで
と感じたところで思い出した。

この前、管理区域にいた子だ。
レイが怒って宥めたり、
後処理や書類が面倒だったからよく覚えている。

向こうもこっちを思い出したようで、
ソファに座って此方を見ると礼を述べてくる。

素直に謝るところを見る限り、
傲慢な人間ではないのだろう。

軽く自己紹介をした後に話を進める。
レイがずっと不機嫌だから、早く進めておかないと
話をなかったことにされかねない。

冗談じゃない。

僕らのパーティーに見合う新人がどれほど希少なことが
それがレイの機嫌のせいで失われたら目も当てられない。

口ではぺらぺらとしゃべりながらも、

少年 リンと言っていた をさりげなく観察する。

まず目に入ったのはこの国では珍しい黒髪と黒目だ。

顔や雰囲気も、どこか神秘的で、

ここにいるよりも神殿で神官をやっているとでも言われたほうがよ
っぽく納得できる。

しかし、本当に、これが騎士だろうか。

薄いシャツとズボンの上からもわかる細い手足に
鍛えたような様子は見当たらない。

いくら少年と言っても、身長も低いのではないか。

しかし、先ほどから気になっているのは
少年から感じる女性らしさだ。

先ほどまで風呂にでも入っていたのか
動くたびに花のような香りが熱と共に立ち上り、
短い髪から見え隠れする白い項は妙な色気がある。

戸惑っているのか瞳を揺らして所在なさげに座る姿は
庇護欲をそそった。

血色の好い薄い深紅の唇と、
濡れ羽色の髪に触れたいと思うのは、
相手が女性でもない限り、僕が思わないことだ。

細い手足も発達途上なのではなく、
女性と考えると納得がゆく。

だが、騎士になる以上そのようなことはありえないだろう。
団長のお墨付きでもあるし、心配はない。

ただ、癖は抜けないのか、
女性に向けるような優しさを少年に見せたことは
ご愛嬌というものだ。

握手をして驚いた。

手にはあかぎれもまめもなく、
指は細く、強く握れば折れてしまいそうだ。
苦労した様子が全くと違ってよいほど見受けられないため、

もしかしたらお坊ちゃんなのではないかと心配になる。

だが、それでもいいと思え、
ここに来るまでは僅かながらあった力量に対する不安がぬぐわれたのは、

精霊獣の瞳が黄金であることに気づいた時だ。

瞳が黄金であることは、

召喚した人物が相当な力を持っていることを意味する。

また、そのような精霊と契約できたということは
心根も奇麗であるということ、
力の大きさだけでなく、ちゃんと精霊術も使えるのだろう。

また、黄金の精霊獣はほかのものと同じように、
暴走の心配をしたり、「縛って」おく必要もないので
心配の種はまた一つ減る。

説明と書類への記入を終え、
部屋に移るため、リンに荷物のことを聞く。

指された鞆をみて驚く。

最初の坊ちゃんという認識は改めよう。
坊ちゃんがこんなに身軽であるはずがない。
しかし、いくらなんでも少なすぎるのではないか。
僕が入ってきたときだって、もう少しはあったはずだ。

そういえば、この部屋を使っている時点で

違和感がある。

精霊獣とも、他で見かけるような主従関係といった風ではなくむしろ

友人……？

そんなことを考えた自分に苦笑する。

いくら契約が許された身であっても、

よっぽどのがなければ精霊が親しくするなど考えられない。

精霊は人間を卑小な存在と考えているようで

世の中の大半の人間には相手にしない。

魔術師も例外ではなく、精霊獣の暴走がおこるのもそのためだ。

確かに誰だつて精根の腐っている様な奴には

従いたくないものだ。

精霊獣の場合、反抗が顕著な形で現れるため、

暴走としてとらえられるのだ。

だが、それも違和感を感じさせている一つの要因であることには違いない。

これで貴水晶だったら、もう何も言わないさ

そう思いながら、客間を後にした。

12（前書き）

これからは更新ゆっくりになる予定です
宜しく願います・・・汗

着いたのはイメージ通りの部屋だった。

質素で、必要最低限のものしか置いていない部屋。

広さはそれなりにあり、風呂場なども設置してあるようだ。

荷物を居間らしき場所に置き、

ソファに座り込む。

いくら同じ施設内とはいえ、

棟も違ったため、相当な距離を靴を持って歩いたのだ。

疲れても無理はない。

レイは用があると出かけてゆき、

今はケイトと部屋に二人である。

「リン君ってどこ生まれなの？」

「家族は？」

「騎士団に入ろうと思ったきっかけは？」

話題としては一般的な世間話ではあるが、

この世界の常識をまだ知らない凜にとっては

ひやひやするものばかりである。

「あ、あのー・・・

その、凜君って呼び方やめていただけませんか？」

朝から、この呼ばれ方はこそばゆいと

感じていたのだ。

「じゃあリンも敬語やめようよ」

「む、無理だと思います・・・」

凜は口が悪い。

と言うか、人に誤解を与えてしまうのだ。

不愛想に訥々と紡がれる言葉は気持ちの良いものではないだろう。

その点、敬語ならば不自由なく使うことができたし、意志を正確に伝えることができた。

「そう。それは残念。」

とケイトが全く思っていないような口ぶりでのたまう。

「確かリンは平民の出なんだっけ」

「はい・・・」

確か、話の流れでそのような設定になっていたはずである。

孤児だったので両親も生まれもわからない。

お使いに行つて絡まれ、騎士に助けられて志した。

そして、性別は、男

少しの真実とうそを織り込みながら話を紡ぐ。

絵本の中のような話ではあるが、一番不自然がない。

嘘をつくことに罪悪感が芽生えたが、

生きてゆくためだ、致し方ない。

「じゃ勉強もしなきゃだね、
本持つてくるからちよつと待っててよ」

そついうとすぐに部屋を出ていく。

はぁ・・と凜はソファに身を預けた。

ケイトとはなんとかなかよくやっていけそうだ。

でも、なんだかレイは自分のことが嫌いなようだ。

そんなことをつらつらとかんがえていると、

シエスが膝に飛び乗ってくる。

そつえばいい天気だ。

こんな日は外を歩いたらきつと気持ちがいいに違いない

手はシエスの滑らかな毛並みを撫でながら、

温かな陽に誘われて凜はうとうとと眠りに落ちて行った

凜は幼くて、母の膝の上で物語を読んでもらっていた。

二人ともとても幸せそうな表情を浮かべている

ああ、これは夢か

母は凜の髪をすきながら語りだす

むかしむかし、勇敢な一人の騎士と、

それはそれは美しいお姫様がいました

物語は終わり、母はさらさらと砂になって消えてゆく。
幼い凜は泣くのを必死にこらえて母を探し求める。

途中で優しい手が頬を撫でて行った気がする

そこに母のぬくもりを見つけたような気がして、
思わずすり寄った。

目を開けると、ケイトがこちらを覗き込んでいた。

「起きた？」

「すみませんっ」

自分のために時間を割いてくれているのに
当の本人が眠りこけているなんて。

「今さっき帰ってきたんだけどね。

気持ちよさそーに寝てたから、

起こすのは忍びなかったんだ」

「あと、リンに勉強を教えてくれるジヨナスさん」

「ジヨナスと申します」

さっき帰ってきたといった。

それではあの頬を撫でて行った手は誰のものだったのだろうか。
疑問を残しながらもジヨナスへ礼を返す。

ジヨナスさんはもともとレイ着きの使用人だったらしく、
流れてこのパーティーの世話係となったのだとか。

いつもは身の回りの細々とした世話をしているらしいが、今回は凜の勉強のお目付け役として適任ということで抜擢されたらしい。

「誠心誠意、この役目務めさせていただきます」

その瞬間、ジヨナスさんの口の端がにやりと吊り上ったのは見ていないことになろう・・・

それから丸々三日間、凜は地獄の中にいた。

思った通りジヨナスさんは相当な「鬼畜」で、騎士の嗜みと称して

この世界のでき方から経済学、政治、果ては法律まできつちりと覚えさせられ、凜は疲れ切っていた。

こんなに勉強をしたことはない。

学校でもなんとなくて受けていた授業もこんなに濃厚な内容だったのだろうか。

しかし、爽快感を感じるのも事実だ。

やりきったという思いが体を満たしている。

「お疲れ様でございました」

ジヨナスがお茶を持ってきてくれた。

「有難う御座います」

ジヨナスと一緒にお茶を飲む。

最初はジヨナスは同席ということに抵抗を示していたが、一人で飲んでも楽しくないと凜が頼み込んだのだ。

「これで、ひとまず机に向かったの勉強は終わりです。私の役目も一段落ですね」

「お世話になりました・・・
でもこれからも話せますよね？」

ええ、とジヨナスが答え、穏やかに時間が過ぎていく。

「机に向かったの、って言いましたよね
じゃあこれからは何をするんですか？」

「ええ、乗馬や剣術、体術、それから」

「ちょ、ちょっと待ってください
お」 僕って魔術師ですよ

「俺」と言いそうになって慌てて言い直す。
ちなみにこの言葉づかいを直すのもジヨナスの講義の一環だった。

「魔術師だからと言って襲われたとき
咄嗟に対応できなかつたらどうします」

「明日からはレイさんとケイトさんが先生ですよ」

「・・・わかり、ました・・・」

おそらく明日からもまた続く地獄に凜は小さくため息をついた。

12(後書き)

10/02 前書きに誤字(?)

13（前書き）

これから馬術とか剣術とか体術とか・・・
が出てきますが、筆者は全くのど素人です

描写で違ふところがあつても、
生暖かい目で見過ごしてやってください
その道の方、申し訳ありません・・・

今日から教わるものが運動系のものになる。

「心配だ」としかいいようがない。

元の世界でもそれなりにしか運動はできるほうではなかった。全くできないというわけではない。

ただ、何かのスポーツをやっていたわけでもなく、鍛えるでもなくできたこの体は、騎士としての役目を果たすことができるだろうか

本分は魔術になるだろうが、

昨日も言われた通り、できたことに越したことはない。

不安ばかりが募る。

「心配するでない」

とシエスが頬を舐める。

不安を感じて来てくれたようだ。

（でも、不安にもなるだろう？）

「問題ない。

お主は芯はできておる。そこに肉づけをしていくだけのこと」

もう一度シエスが頬をなめる。

そこから何か温かなものが伝わってきた。

覇気のない凜を心配する気持ち、自分が勇気づけられないもどかさ……

そこまでいってこれはシエスの思いだと理解する。

（……ありがとう）

シエスに頬ずりをしてたちあがる。

こんな小さなことで憂う暇はなかった。

寝間着からすでに用意されていた服に着替える。

二人は既に朝の鍛錬に向かったようだ。

さらしを巻き直すために姿見の前に立つ。

（何だこれ……）

右の鎖骨の部分にタトゥーのように何か掘り込まれている。

体を近づけてよく模様を見れば、

何かわからない言葉とバラがデザインされた紋様のようなものだった。

紋様の色は少し青みがかったような黒。

「どうしたリン」

シエスが足元で座る。

「私の紋様か。うむ。奇麗に入っておる」

（え？これって……）

「我が共におるとい証よ」

どうやら契約印のようなものらしい。

しかし・・・

（これ、入れなおせないのか・・・？）

紋様の入っている位置は、

下の部分が少しさらしで隠れるほどだ。

みえるならみえるなりの、

見えないならみえないなりの着こなしというものがあるが、

中途半端だ・・・

しかし、それを言えばおそらくシエスは少なからず傷つくだろう。

先ほども心配をかけたのだし、この程度のことなら胸にしまつべきだ。

着替え終わるとほぼ同時に

ジヨナスが部屋へと入ってくる。

「そろそろ鍛錬場へ向かいましょう

案内いたします」

「お願いします」

鍛錬場ではすでに多くの騎士たちが訓練に励んでいた。

恐らく二人もこの中にいるのだらうと見当をつける。

・・・が、如何せん騎士の数が多すぎる。

そこできよときよと探していたが、

不意に背後からきた衝撃で膝をついた。

「!？」

「悪いな、あんまりにも貧相だったものでみえなかった」

振り返ると5人くらいの騎士が凜を見下ろして笑っている。

先ほどのセリフは真ん中の気取った騎士が言ったものだらう。

「さすが下男だな、その服よく似合っているぞ」

「こんなやつにはこんな服しか合わないんですよ」

不快な笑い声をあげながら、凜を貶める言葉を吐き続ける。

騎士たちの会話から得られたのは、階級のようなものが服で示されるということ。

傲慢そうなしぐさや、言葉づかいを見る限り、

この人たちは貴族なのだろう。

さしずめ、みたことのない下っ端の新人をみつけ、

いびりにはいったということだろうか。

「こんなやつが何故騎士団に入れたんだらうな」

「きつと見る目が節穴なんですよ」

それまで無意味な嘲笑を受け流していた凜だったが、

その言葉を聞いて怒りがこみ上げる。

自分のことを言うならまだしも、
ミーナや、団長のことを悪く言うのは許せない。

「取り消してください・・・」

「む？」

「取り消してください！」

ほかの人のことまで悪く言うのは違うと思います」

立ち上がり、凜は叫んだ。

基本凜は懐が広い。

めったに怒ることもしなかったため、
自分でも声をあげた自分に驚いていた。

「何だと！」

「アスタ様にたてつくなど！」

取り巻きの一人が拳を握り、
そのまま凜の顔へと向かってくる。

殴られる・・・！

・・・と、

「リーーン」

目をうつすらと開ければ、

笑顔で手をぶんぶんと振りながら走るケイト。

騎士たちはそれをみるなり顔を青くし、
脱兎のごとく立ち去った。

「お待たせー僕らの鍛錬はあっちでやるよー」

「はい・・・あの、ありがとうございました」

「何がー？」

前を向きながらにこにここと笑うケイト。
わかっていて、わからないふりをしているのだろう。

多分、あのままいけば凜は立ち上がることもできないほどに
痛めつけられていた。

途中で通り過ぎていく人も、興味がないといったかのように
助けるでもなく過ぎ去っていった。

「・・・いえ。何でも。」

「なら良いけどー」

連れてこられた場所にはケイト以外誰も居なかった。
土が敷き詰められ、鍛錬場として設備を整えられていた
先ほどの場と趣向が違ふようだ。

森を切り開いてそのまま場としたかのようなそこには
多くの精霊たちの気配らしきものが感じられた。

恐らくは好奇心に惹かれてやってきたのだろう。

「それで、何をするんですか？」

「まずは体術だよー」

体術を会得し、基礎を整えたうえで
剣術などの他の物へとうつるらしい。

「今日は僕が講師だよーよろしくー」

「よろしくお願いします」

にこにこ笑うケイトにほっとしたのは事実だ。
しかし、そのケイトの本性を見誤っていた・・・！

「リン、軸がぶれたよーあと20分追加ねー」

微笑みを絶やさず指示を出す姿は鬼にしか見えない・・・

訓練内容はじつと座り続けるものから、
同じ型を延々と繰り返し返すもの、
ケイトに型を教わる・・・等々だ。

しかし、それらどれもが凜を精神的にも体力的にも疲労させた
ということはおこつ。

時には鍛錬が終わるなり意識を失い、

ケイトがジョナスにほどほどにするよう咎められたときさえあった。

ケイトに一通りはできるようになったことを
認めてもらえるまで、それは続いた・・・

ようやくケイトからお墨付きをもらい、
凜は次の武術の指導を受けることになった。

服がいつもと違う

今まではズボンは木綿のような素材で、
それに同じ生地ゆったりとしたシャツだけであつた。

靴もメイドが履いているものと同じような軽いもので、
何かに対して特化したような雰囲気は見受けられなかった。

今日、準備されているのはいつもの服に加え、
革のライダーズジャケットのようなもの。
靴も編み上げブーツのようで、少し重い。

凜が心配したのは、この上着によってでてくる体のラインである。
今まではゆったりとしたシャツだったため
誤魔化せていたが、この上着は少しきついくらいで
しっかりとボタンを留めると体の線が露わになってしまうのだ。

さらしを巻きつけて男の体に近づけていても、
その華奢な体軀は隠せるものではない。

凜は誰かに見とがめられるのではないかと
戦々恐々としながらも、新しい訓練に胸を膨らませていた。

対してシエスは不満顔である。

訓練の間は部屋に籠っていなければならないのだ。

前に出ようとしたところをジョナスに発見され、
酷い目にあつたらしい。

今までのケイトの指導の時も同じであつたため、
相当ストレスがたまっているようだ。

「氣にくわぬ。何故我がこの様な箱に閉じ込められねばならぬ」

ふんと鼻を鳴らしてベッドに
寝そべるシエスを宥めながら凜は着替える。

（終わつたら庭園へ行こう。それまで待ってくれ）

外出をしようとすれば何故か三人から止められてしまう凜が
行くことを許された場が「庭園」である。

宿舎の裏にある空き地は庭園とは呼ばれているものの、
観賞用の草花の類は全くない。

凜と一緒にならばシエスも外へと出られるため、
人もあまり来ず、自由に使えるこの空き地を
凜とシエスは運動場として利用していた。

「・・・うむ。早く戻ってくるがよい」

（わかつてる。じゃ、行ってくるから）

不満顔ながらも見送ると言って尾を振るシェスに
これが本当に気位の高い精霊なのかと苦笑しながら
凜は部屋を出た。

ケイトのときと同じように森の中へと向かう。
其処に居たのは

「レイ！」

「遅い。」

相変わらず不機嫌そうに腕組みをし、
木にもたれて此方を見ている。

もしかしたら見知らぬ騎士が指導官になるのではと
不安であったが、無用であったようだ。

見れば、レイの服も似たような上着にブーツだ。
ただレイのものは真新しい凜のものとは違い、
何回も着られたのか、こなれている。

「レイは何を指導してくれるんですか？」

「乗馬だ。行くぞ。」

「え、ど、どこへ？」

凜が向かうなり、レイはさっさと森の奥へと歩き出す。

よく見れば、地面には獣道程度につつすらと草が踏み分けられた跡があった。

「厩舎に決まっているだろう。」

「馬を、選ぶ、んですか」

歩く速度も速いが、嫌味かと思うほどに足の長いレイに置いてゆかれそうになって凜は小走りになる。

「乗馬の経験は」

「ない、です」

舌打ちが聞こえた気がする。

しかし、これは仕方のないことともいえる。

ケイトは一回も嫌な顔をしなかったが、それはケイトの表情に「微笑み」というものが標準装備されているからだろう。

断じて虐めて遊んでいたのだとは思いたくない。

レイとしては、こんな坊主の指導よりも

一人で鍛錬でもしていたほうがよっぽど有益だろう。

「すみ、ません」

「何がだ」

レイは振り返らずに答える。

「レイも、こんな、こと、したくは、ありません、よね」
「だから、謝ろうと」

「俺は引き受けた。だからやる。
「ごちゃごちゃ言つな。」

凜は呆氣にとられる。

文句の一つでも言われるかと思っていたのだ。

しかし、氣を取り直してありがとうとほほ笑んだ。

ちなみに日本人の習性上、凜もほほ笑みは標準装備である。

（自らこう言ってくれるのなら、
しっかりと練習に打ち込んで早くできるようにならなければ）
と息巻く。

そのためか、レイの耳が僅かに赤くなっているのには氣が付かなかった。
った。

そのまま歩くと急に視界が開ける。

厩舎は右側にみえる木造の建物だろう。

目の前に広がる牧場のような草原で馬が草を食んでいる。

「おお、レイさんか。今日はどうしたんだい？
今日は馬の日じゃなからうに」

此方へ向かってきたのはおそらく厩舎番なのであろう。
干し草を運んでいたようで、ワゴンを押している。

「ああ。こいつの馬を。」

「へえ。こちらの坊ちゃんかい」

厩舎番は凜へと目を向ける。

「うーん、こんなに細いのは久しぶりだねえ
合つ子は居るかね」

厩舎番はワゴンを押しながら厩舎の中へと入っていく。
続いたレイに、慌てて凜もついて行った。

15 (前書き)

し、進展が遅いですね・・・汗

馬房内は予想以上に広々としていた。

中に200頭以上は居るのではないだろうか。

一頭一頭のスペースも充分にとつてあり、

敷いてある藁は清潔で、

とても住み心地が良さそうだ。

「あとは頼んだ」

レイは迷いもなく前方へと歩いていく。

ついていこうとする凜を厩舎番が止めた。

「レイさんは自分の馬のところに行くみたいだね

お前さんは馬を選ぶんだろう？

ならついてきな」

厩舎番はレイが行った方向とは違う、

右の細い通路へと入っていく。

凜は慌てて後を追った。

「あつちはまだもう持ち主が決まってる馬が居るところだね、

こつちが選べる馬のいるところさ」

着いたのは一瞬見ただけでは先ほどと変わらないようであった。

しかし、先ほどは仕切りに名前のようなものを書いたプレートがつ

いていた。

こちらにはついていない。

おそらく、あのプレートがその馬の所有者を示しているのだろう。

「どうやって選ぶんですか？」

「そうさな、選ぶというよりは
騎士さんは馬に選ばれるのさ。」

これでは、某 額に傷のある男の子の物語の中での
杖と同じではないか と凜は思う。

「馬が、こいつを主人にしてもいいと思ったら
その馬に乗れるんだ

認めてないやつが乗っても一個も従いやしない」

「一頭一頭触って行ってみな
時間はあるだろう？」

その言葉に頷き、凜は前へと足を踏み出す。
一番近くに居た馬の鼻面に触れようとす
が。

「あつ」

馬はいやいやをするかのように
首を振り、馬房の後ろへと下がって行ってしまう。

気を取り直し、進んでいくが
どの馬も似たような反応で、
もしかしたら馬に嫌われているのではないかと挫けそうになる。

厩舎番は既にその場を去っており、
凜だけが馬と向き合う。

残り一頭となり、
もう駄目かもしれないと半ば諦めに入りながら
凜は手を伸ばす。

また、逃げられてしまっただろう

と、手に湿った何かが当たる。

視線をあげれば、円らな瞳が見つめ返していた。
強い意志を持ってこちらを見返してくるそれに
凜は時間が止まった気がした。

（認めて、くれるのか）

【ええ】

思わず語りかけていたが、
返答があるとは思わず、思わず後ずさった。
途端に声は聞こえなくなる。

おそろおそろもう一度触れると、
あきれたような声が降ってくる。

【認めないほうが良かったですか？

折角久しぶりに認めてあげようと思ったのに

】

「いや、嬉しい！」

ありがとう。ありがとう！」

「ん？見つかったのかい」

声が聞こえたのか厩舎番が歩いてくる。

その顔は凜が撫でている馬を見て驚きの色で染まった。

「そ、そいつかい？」

本当に、それでいいのかい？」

他の厩舎まで行けば、もっと他に持ち主のいない馬は居たのかもしれない。

しかし、凜はこの馬に魅せられてしまっていた。

空の様に優しい目。シエスと同じような艶々とした漆黒の毛並み。なぜか、この馬以外には自分の馬は居ないとまで思えた。

「ええ、いいんです。」

この子が良いんです。」

【それは光栄なことですね】

優しい目で馬を見つめ、言い切る凜に、
一つため息をついて厩舎番は口を開く。

「・・・わかったよ。」

おまえさんがそこまで言うのなら」

「レイさんは外で待ってる。」

道具を貸してやるからちょっと待ってな」

厩舎番は外へと走っていく。
再び二人（一人と一匹）だけになり、
凜は鼻に触れて話し出す。

（本当に、ありがとう。）

それで、名前を聞いても？

【ノールです。

イル、とお呼びください】

少し誇らしげに名前を告げるイルに
笑みを浮かべる。

（イル、な。

これから宜しく。）

【それで、不躰とは存じますが、
貴方は男性の方なのですか・・・？】

困惑したような瞳を見て、
凜ははつきりと答えた。

（女だ。

訳があつてこんな恰好をしている）

【やはり、そうでしたか！

動物としての本能が何か違うと告げていましてね。
良かった良かった。

このような方を主人にできるなんて幸せだ。

むさ苦しい男共が来ても従わなくて良かった
あの汚らしい手に触れられるかと思うとぞっとする
】

(・・・イル?)

【あのような虫けらなど
おっと、これは申し訳ございませんでした】

途中から素の部分が垣間見えた気がする。
だがここは見て見ぬふりをするのが日本人の美德というものである。

(・・・自分は一回も乗馬経験はないんだ。
大丈夫だろうか?)

【心配は無用に御座います。
全身全霊サポートいたします】

そのままイルに乗馬時のコツなど教えてもらおう。
一通りの知識を頭に詰め込んだところで
厩舎番が大儀そうに何かを運んでくる。
おそらく、鞍や鎧の類だろう。

まだつけ方は分からなかったため、
厩舎番に教わりながら取り付けた。

準備が終わり。

ようやく凜は、レイが居るという訓練場へと向かった。

凜を送り出した厩舎番はため息をついた。

あの馬は、前の持ち主が戦死するまでは引く手あまたの名馬であった。

しかし、それ以外の騎士には見向きもせず、時には攻撃することさえあった。

このまま、厩舎の隅でくさっていくのは勿体がないとは思っていた。

しかし、あのように細い子の手におえるだろうか。
時の戦神を勝利へと導いたあの馬を。

だが、どうせ今までと同じように振り落されて終わりだろう。
その時はまた新しい馬をつれてきてやる。
ひとまず、あの子が音をあげて逃げ帰ってくるのを待とうじゃないか。

そんなことを考えながら
訓練場へ向かった厩舎番が目にしたのは、
想像とはかけ離れた光景であった。

16（前書き）

昨日は、やはり家に帰った。気が抜けてしまい、投下できませんでした・・・

レイは既に場内を走っていた。

否、その姿を見るならば、「飛んでいる」と表現するほうが相応しいかもしれない。

軽々と障害物を跳び越し、颯爽と駆けぬける様は見惚れるほどに美しかった。

「馬は選んだか」

「ええ、この子です」

凜たちに気づいたのか、並足に変えて此方へとやってくる。

「なら、早速乗ってもらおう。

経験は、無いんだっただな？」

「・・・御恥ずかしながら」

そこから基本的な馬具の名称、

乗るときの注意、コツなどを乗りながら教わり、

凜はすぐに乗れるようになっていた。

とは言っても、運動が得意という訳ではない凜がこのように直ぐに慣れられたのは、ひとえにイルのおかげだろう。

【大丈夫ですか？

揺れがきつくはありませんか？】

先ほどからずっとこのように気にかけてくれている。因みに、敬語なのはやめてほしいと頼んでも無下に断られてしまった。

凜もレイやシェスに対して言葉を崩せずにいるため、あまり強いことは言えず、このまま落ち着いた。

（大丈夫、ありがとう）

とは言ってもイルは優しく、技術的な面でもパートナーとして最高だった。

さっきまではだく足でゆっくりと場内を巡っていたが、レイのお許しも得て、駆け足で走ってみることにした。

頬を撫でる風が心地よい。

気を引き締めねばならないのは分かっているが、これからの生活への不安、「戦い」と言う行動への恐怖、そういうものを全て忘れ、一時この風に身を預けて 只々走っていたかった。

と、目の前にウサギが横から飛び込んでくるのが見えた。森から迷い込んだのだろうか。

円らかな瞳が此方を見る。

今は駆け足。

いくらイルと言えど、急に止まることはできない。

そのまま棹立ちになる。

手綱を掴もうとした手は空を切る。

凜は衝撃に備えて身を固くした

あいつには本当に驚かされる。

選んできた馬を見たときは見間違いだ、とさえ思った。

俺が一度も触れることのできなかったあれを、

「あれ」を、手馴れたと言うのか。

だが凜をみる知性に溢れたその目には、
敬愛と服従の意がみえる。

その思いは本当なのだろう。

初めは大抵馬との思いが通じず、初っ端からあのように軽々と走る
ことなどできない。

あの馬は流石、と言うべきなのか、

リンの動きをフォローして上手く乗せてやっている。

リンも馬を信頼し、身を任せている。

駆け足を許し、思わず見て言葉を失った。

鬣をなびかせ、筋肉を躍動させる青毛の馬を、凜々しく御するその
姿。

パズルのピースの様にぴったりと馴染んでいた。

なんだか神聖なようなものに思え、声を掛けるのさえためらわれた。

だが、そろそろ戻らねばならない時間だ。

呼ぼうとして、目にしたものに馬を駆けさせる。

いくらあの馬が優秀だとは言ってもリンが落ちることは免れない。

間に合うかつ

横から必死で差し出した腕にそれはぼすりとおさまった。
落ちると思っていたのか、体がかたい。

違和感を感じたらしい、目が明く。

自分が俺の腕の中に居るのに驚いている。

体を更に小さくして、慌てて何度も謝ってくる。

あれは仕方がなかった、お前のせいではないと何度言ってもすまな
そうに顔を曇らせている。

リンの馬を呼び、馬から降りてリンを地面に下した

「つつ」

聞こえるか聞こえないかの小さな声をとらえる。

何でもないと頭をふるリンを捕まえ、足の様子をみる。

あの様子からすると足首だろう。

思った通りそこは熱を持って腫れていた。

おそらく落ちる時に足が引っ掛かったのだ。

これでは到底宿舍まで自分の足で歩くことはできないだろう。

そう判断した俺はリンを横抱きにする。

いわゆる「お姫様抱っこ」というやつだ。

この形が一番患部にも、俺にも負担がかからない筈だ。

慌てふためき、「重いからおろせ」とわめくリンに、

この足で帰れるのかと返すと言葉を詰まらせている。

しかし、本当に軽い。

発達途上とはいえ、あまりにも細く、小さすぎる。きつとこの体は片腕でも抱えられる。

ふと、こいつは本当に男なのだろうかと思う。

上目使いで見上げる潤んだ瞳。

羞恥で染まった頬。

華奢な体は力加減を間違えれば壊してしまいそうだった。

今は諦めたのか、恥ずかしそうに俺の胸元に顔を埋めている。

乗馬服を握りしめる小さな手は庇護欲をそそった。

髪から見え隠れする細い項に顔を近づけて香りを嗅いでみたくなる。

そのような趣味があるのは知っているが、俺にはないはずだ。しかし先ほどの姿をみて感じたものはなんだ？

「硬派」として名が通っている俺とて恋愛経験が少ないわけではない。

幼いころは青臭く胸をときめかせもしたし、

大人になってからの駆け引きを楽しんだこともある。

自分の思いに気づけぬ程、初心ではない。

だが、その経験が声高に叫んでいる。

先ほどの思いは、「恋」だと。「欲情」なのだと。

そんなはずはない。

こいつは男で、俺も男で。

そんな風に心に理論で蓋をした。

ただ、この体に今しばし触れていたい、この穏やかな時間に浸りたい、と思っていることには気づけなかった。

17 (前書き)

少し遅れてしまいました(汗

気が付くとそこは既に自室のベッドの上だった。運ばれている内に寝入ってしまったようだ。

宿舎の部屋はパーティーごとに一部屋である。

だが、一部屋一部屋が家のようであり、小さくとも各自のスペースのような空間が割り当てられている。リビングのような部屋もドアを入るとすぐにあり、打ち合わせや来客スペースとして用いるのだろう。

ゆっくりと体をおこすとシェスがぽんと飛び乗ってきた。

「気分はどうだ」

（全然大丈夫。ありがとう）

窓の外を見れば真っ暗闇で、相当な時間眠っていたのだろう。その間、ずっと見てくれていたのだろうか。

（・・・ごめん）

「当然のことをしたまで」

そうとだけ答えるとシェスはベッドの上で丸くなる。喉が渴いているのに気づき、机に乗っていた水差しからレモン水を飲んで、再び横になる。

折角、新しいことに取り組み始めると思っていたのに

初日から失敗してしまった。

この感じだと、暫く実習は不可能だろう。

ずっと、お世話にばかりなっている。

早く何かしたい、世話をしてもらっただけではなく、自分も役に立ちたい。

そんな想いだけが募っていく。

使命とか、義務とか。

そういうものを求めていたのかもしれない。

此方の世界で、生きるための指標になるような。

するりとシエスが布団へともぐりこんでくる。

頬を舐められて、凜はくすぐったくて声をあげて笑った。

「落ち着け。今、できることを考えるべきであろうに」

心中を見透かされている気がした。

すうっと焦りが、熱がひいていく。

枕元に座りなおしたシエスの毛並みを整えながら考える。

今、の自分に、できることは・・・？

気持ちばかりが急いていたことを恥じた。

こんな状態ではできるものもできないだろう。

己の現状を嘆くのではなく、それを踏まえてどうするべきか。分かっていたはずだったが、忘れてしまっていたようだ。

明日、何をしようか。

そんなことつらつらと考えているうちに、眠りについた。

凜が完全に眠ったのを確認して、人影がむくりと身を起こした。
目は金色、髪は漆黒。
シエスの人型である。

「本当に、手間のかかる生き物よ」

言葉は乱暴だが、凜の顔にかかった髪をはらう手は慈愛に満ちている。

いつものように精霊界で退屈ではあるが、平穏な毎日を暮していた。
精霊の中でも上位に位置するこの精霊には、人間界の度の過ぎる不
調や、
混乱を直す役目を持っていた。

人間などつまらぬ存在。
なぜ、お互いを憎み、疎み、殺しあう必要がある。
その刹那にも等しき一生の中で。

人間と言う種族が理解できなかった。
嫌いだったのではない。

只々、なぜそんなにも負の感情を持ち得るのか不思議だった。

何度か人間の精霊術師とやらに召喚されたこともある。

だが、みな欲にまみれていた。

表向きは聖人君子だろうとも、精霊のその身に誤魔化しは効かなかった。

契約はことごとく断ってきた。

一瞬良いと思えても、次の瞬間には人間の奥底が見えて、辟易せざるをえなかった。

そんな折、久しぶりに召喚を受けた。

この身と呼ぶには相当な力を必要とする。

そんなにしてまで、どうして我を求める？

しかし、喚ばれれば行かねばならぬ。

仕方がなく、重い腰をおこし、精霊界と人間界の狭間へと足を運んだ。

其処に居たのは一人の少女だった。

初めは姿を見せずに人間側から呼びかけてるのが普通だ。

しかし、少女は知らないらしく、何も無い空間の中で瞳をさまよわせている。

欲しい、と思った。

この少女の魂は深く傷ついていた。

しかし、それ以上に、神々しいまでに透き通り、輝きを放っていた。このような魂を持つものなど、今までに見たことがなかった。

初めて、精霊は人間と話したいと願った。

「普通」を無視して此方から呼びかける。

どこから声が聞こえるのか不思議なのだろう。
きよときよとと辺りを見回している。

ほほえましい姿に頬が緩みそうになるが、ここは威厳を保つべきだ。

再び問いかければ、誰かと問ってくる。

本当に知らなかったのか。

力を欲するか、と聞けば輝く瞳で貸してくれと頼んできた。

本当に、不思議な娘よ。

メイシエスと名付けられた。

不思議と、それがもとの己の名前であった気がした。

真名も、心も、すでに少女に捕らわれていた。

少女の前に姿を現す。

瞳に映っている黒豹をみて、己の姿を初めて知った。

その少女はあの時の威厳はどこへやら、幼い寝顔を無防備にさらしている。

夢を見ているのだろうか、うなされて汗ばんだ小さな手を握ってやれば、顔は華の様に綻ぶ。

どこにでもあるような、小さな命だ。

だが、今はかけがえのない存在でもある。
憎悪と嫉妬にまみれたこの世界に、おいておきたくないと思えるほどに。

リンよ。我に世界を、そなたの瞳からみる世界を、教えてくれ
一匹と、一人の夜は更けていく。

18（前書き）

今回は少し短めです。
閑話的な雰囲気。

「今回は私よ！」

「いいえ、あなたはの間行つたでしょう！？今回は私！」

「あなたたち何を言っているの、私に決まっているでしょう！」

「いい加減になさい」

「……メイド長様！！」「」

「主様をお慕いするのは結構ですが、仕事に影響が出るようであれば、

二度と御前に出られないようにも出来るのですよ」

「……も、申し訳ございません！！」「」

メイド長はため息をついてメイドたちの部屋を出た。

メイドたちの目下の話題は、最近入団した騎士のことだ。

「ケイト様も王子様のように素敵だわ」

「あら、レイ様だってあのクールな感じがかっこいいのよ」

「でも今はやっぱり……」

「……リン様よねー！！」「」

メイドたちは、「騎士様ランキング」を内々に作っているらしい。今までは不動の一位と二位としてフェール・レイチェルとケイト・ラメリアが君臨していたのだが、

ここ最近人気が急上昇しているのが「リン・シノハラ」である。

先日怪我をして鍛錬に参加できなくなったようで、よく宿舎内での散歩や庭園に日向ぼっこに向かっているのをよくみかける。

入団してからパーティーの面々が外に出ることを許さず、

口裏合わせのためで本当は居ないとか、

あまりにも実力が不在ことが判明したのだとか、様々な憶測が飛び交っていた。

しかし、今回の怪我で騎士団の土地内なら歩くことを許されたく、

メイドたちもようやく会うことができるようになった。

そして、噂はあっという間に立ち消えになった。なぜなら・・・

「もうどこの方でも構わないわ」

とメイドたちが骨抜きになってしまったからで。。

（確かに騒ぐのも無理はないと思うけど・・・）

シノハラはこの国ではあまりみかけないような風貌をしている。

異国風の顔立ちに、珍しい黒髪黒目。

出自も、孤児のために不明で、神秘的。

年齢も幼く童顔で、「守ってあげたくなる」らしい。

だが、人気の理由はそれだけではないらしい

「あの、すみません」

「は、はい何でございましょう」

声を掛けられたが気づくのに遅れてしまい、動揺しながら礼の形をとる。

「えっと、風の庭園に行くのにはこっちでいいんですね？」

「おっしゃる通りで」

「お恥ずかしながら、道には迷いやすいんです」

ありがとうございますとひよこひよこ足を引きずりながら去っていく背中を見て、

メイド長は複雑な表情になる。

人気のもう一つの理由は柔らかなあの態度である。

騎士にはその身分故に驕ったり、傲慢になったりして

使用人たちに横柄な態度をとるものも少なくはない。

そのなかでシノハラは何かするたびに「すみません」「ありがとうございます」と礼を伝え、

決して怒りちらしたりすることもない。

ケイト・ラメリアの妖艶なものとは違う、朴訥としていながらも優雅な物腰。

一時は、どこかの王族なのではないかとさえ噂も流れた。

しかし、そのようなことはメイド長に関係はない。

どのような人物であっても忠誠を尽くすのが使用人の定めである。

だがそのようにいかないのも人間であり・・・

メイドたちがこそそと柱の影を動いていくのがみえる。

今日もまた、お茶やら手拭やらを渡しに行くのだろう。

（他の仕事をしっかりやってくれれば問題はないのだけれど）

メイド長は何回目になるかわからないため息をついた。

凜は風の庭園のベンチで日向ぼっこをしながら本を読んでいた。どういふ風の吹き回しか知らないが、急に外に出てもよくなり、部屋にじっとしているのが苦手な凜はこうして散歩に出向いている。シエスと訓練に使っていた嘘っぱちの庭園とは違い、本当に花咲き乱れるというような表現がぴったりの庭園が、土地内にはちゃんとあるらしい。

「華」「空」などあって、此处は中でも凜のお気に入り「風」の庭園だ。

他の庭園よりも落ち着いた雰囲気、花の香りも控えめだ。

んー、と一つ伸びをする。

この間までマナー地獄や、ケイトにしごかれていたのが嘘の様に平和だ。

最近はメイドさんたちが何故か差し入れやお茶を持ってくる時間。くる時間も場所も不定期なのに、どうやってみつけているのだろう。

凜は首を傾げる。

メイド長の気苦労も、凜には知る由もなかった。

19（前書き）

番外編のようなものですが、とりあえず本編として投稿します。
凜の馬、イル視点。

「貴方はよく毎日飽きませんね」

【主こそ、この様に閉じ込められてよく逃げ出そうと思わんことよ】
呆れて苛立っているような調子で話すイルの柵に、シエスは気にした風もなく飛び乗る。

此処は主の決まっている馬の馬房。

毎日凜が居ない間に、シエスは人々の目をかいくぐってこうしてやってきていた。

凜は、このことは間違いなく知らない。

ばれてしまえば、大切な主に心配をかけるのは分かっているが、それよりも持て余した時間をつぶす方がシエスにとっては比重が大きかった。

イルもまた、言葉ではこうは言っているが、乗り手の近況が聞けるのは有難いことであつた。

あの「戦神」とよばれた男以来、初めて受け入れた新しい、乗り手である少女。

事故であつたとはいえ、怪我の要因の中にはイルも含まれている。勿論、リンが自分を責めないことなど、その人柄をみればわかっているが、怪我をしたことにより馬房にも来れなくなり、イルは不安を感じていたのだ。

規則を守っていないことは評価できなかったが、シエスの話をきいて、その自責の念が和らげられていたのも、また事実なのである。

シエスは「使用人たちが凜に母性本能をくすぐられている」という話を滔々と語り続けている。

あまり興味も湧かず、適当に相槌を打ちながらイルは自分の世界に入ってゆく。

イルの前の乗り手は、屈強な戦士であった。

よく言えば豪胆、悪く言えば単純で、だがそれゆえに人々についてゆかせるような何かを持っていた。

イルもまた、男に魅せられた一頭であった。

男が死んだときにはひどい喪失感に襲われたものだった。

あの無骨な手で、労わるように梳かれるのは、二度とないのだ。

その時からイルは気性が激しくなり、人を近づけなくなった。

男が生きていたときには「世紀の名馬」とまで呼ばれ、落ち着いた性格で幼子にも懐かれていたのに。

毎年毎年、新しい騎士たちがやってきても見向きもしなかった。

あの男はもつと鍛えられた体をしていた

あの男はもつと器が広がった

あの男はもつと魂が輝いていた

あの男は…

いつも比較しては難癖をつけ、誰一人として選ばうとしなかった。たまに無理やりにも使えさせようとしたものもいたが、そのような人間はイルの名声にだけ気をとられ、心はひどく濁り切っていた。そんなイルを世間は忘れてゆき、いつのまにか馬房の薄暗い隅がイ

ルの定位置となっていた。

あの男に勝てるような人間でなければ、乗せてやることなどしない

それは、より強いものに従いたいといった、プロ意識のようなものからきていると言っても良かった。

だが、そんなものではないことはイルにも分かっていた。

男は、イルが脚をうたれ、体制を崩したところを討たれた。怖かったのだ。

自分のせいで、また乗り手がいなくなる。

また、あの喪失感に襲われなければならない。

自分の弱さと向き合えないまま何年かが過ぎて行つた。

ある日、新しい騎士がやってきた。

季節外れにやってきたそれに、イルは興味を持った。

見るくらいはしてやつても

そうして、徐々に近づいてくる騎士をみて、その魂の強さに囚われた。

傷ついても、なお輝く光。

此方をみつめる瞳は、どこまでも澄んでいた。

即座に仕えることを決めた。

今までの暗い、底なしの想いさえも、この人に仕えたいという意志の前では何の意味もなさなかった。

だが、あれはあまりにも軽すぎる。

彼女は男のふりをしていと言っていた。

だが自分の上に乗った時に、あまりの軽さに本当に乗っているのか確認しようかと思ったほどだ。

少年のふりをするのには、あまりにも華奢すぎるのではないだろうか。

しかし、無事でよかった。

あの時、また乗り手を失うのかと思って絶望に陥りそうになった。だが、捻挫だけで済んだとシエスから聞き、安堵し、また暗闇の中へと入りかけていた心を引き返させることができた。

この獣は、何を考えているのだろうか。

ふとそんなことを思っ、シエスのほうをみる。

それは、リンに使えるもの同士としての好敵手意識ライバルのようなものだった。

リンの近くに居られることに対しての、嫉妬も交じっていたかもしれない。

シエスはまだ、リンが使用人を虜にしているという話を熱っぽく語り続けていた。

ああ、これもまた、あの人に囚われているのだ。

シエスの目をみて、確信した。

彼の、リンに対する愛情の前では嫉妬など無意味だった。

彼女は、この気位の高い精霊でさえも引き付けてしまったのだった。

あの人は、何もかもを変えてゆく

きつと、彼女が望むと望まないとに関わらず、彼女の周りには嵐が
まきおこるのだらう。

これから起こるであろうことにイルは思いを馳せた。

落馬してから時間も経ち、凜の怪我は治っていると言っても良い状態ではあった。

しかし、ミーナの「まだ運動をするには時期尚早」という診断により、

凜には身体の異状による強制欠務ではなく、一時的な休暇のようなものが与えられていた。

凜としてはもう始めても大丈夫だという感じはあったし、

早く後れを取り戻したいという気持ちもあった。

だが、訓練させてもらおうとミーナに許可をだすよう訴えても、

「訓練は健康状態の完全なものしか行つてはならない」という規則があるのだ、

と言われれば引き下がるしかなかった。

怪我が酷かったところに散策は粗方終わり、散歩はそろそろ飽きてきていた。

訓練もできず、凜は暇を持て余していた。そこに、ジオナスの提案があった。

時間があるのなら、知識を再確認してみてはどうか、と。

そこまで凜は、勉強は嫌いでもなかったが、好きな方でもなかった。そのためにその選択肢は見えて見ぬふりをしていたのだが、言われてしまえば無視することはできない。

だが、実際言ってもらえて良かったと本を読みながら凜は思う。

短期間で詰め込んだ知識には穴が多く、またこの世界で常識となっているような事柄も抜け落ちていた。

異なる世界から来た凜にとっては馴染のないものが多く、頭が受け

付けていなかったのだろう。

今は国と国の関係についての文献を読んでいる。

凜は何度も読まれたのか、開き癖のついたページを広げる。

今居るフェルタイル国についての記述だ。

領土は小さいが、豊かな土壌と、進んだ魔術の研究、更に賢王の政治により、

国民は水準の高い暮らしを営んでいる、と書かれている。

この辛口な文献としては、かなり高評価の記述である。

（落ちたのが、フェルタイルで良かった）

もし、あまり治安の良くない国などに落ちてしまえば、

実感はわからないが、奴隷商人やその類の商人はいるはずだ。

もっとも、容認している国は少なかったはずであるが、

どの世界でも法の目を掻い潜って利益を得ようとする輩は居るよう
だ。

右も左もわからなかった落ちてきたばかりの凜なら、

騙し、売り飛ばすことなど赤子の手を捻るより簡単だっただろう。

その他にも国は30個程度はあったがもともと地理の得意ではない
凜は、どんどんページを繰っていく。

だが、その手がある項でぴたりと止まった。

前にジョナスから注意してほしいと言われたエンビヒエ国の部分だ。

この国は度重なる侵略を繰り返し、今では最も大きな面積を誇る。

だがそのような輝かしい情報とは反対に、

王はお飾りと化し、役人たちが市民から重い税を徴収して蜜を吸っ
ている、

公共設備は整っておらず、治安も衛生も悪いとある。

その下には属国にした国には、更に重い税を強いたり、その国の研究や文化を取り上げてしまつとまで書かれていた。

エンビヒエ国には研究者や魔術者が少ないらしく、

属国の魔術者たちは強制的に軍に入隊させられるようだ。

何もこの文献だけが情報のすべてではないが、

これほどまでに書かれる国とはいったいどんな状態なのだろう、と凜は眉根を寄せる。

フェルタイルが安全なのは、国境をエンビヒエ国と接していないことと、有能な騎士団があるからだ。

もし、その強みがなければ、小さなフェルタイルなどあつという間に飲み込まれてしまつだろう。

そんなことはさせない、と凜は強く思う。

せめて、この国立騎士団に入ったのだから、少しでも恩返しをしたい。

様々に考えながら読んでいると、外から使用人の軽やかな笑い声が風に乗って運ばれてくる。

窓を開けて下を覗けば、いつも見るような制服ではなく、鮮やかな色彩を纏つて三人ほどで歩いているのが見えた。

手に袋をたくさん提げているところを見ると、

今日は休めで友達と買い物に出かけた、といったところだろうか。

未だ騎士団の本拠地から出たことのない凜は、街並みに想いを馳せる。

人と人が触れ合つておこるざわめきの中に身を置くのは心地が良かった。

だが、女性としての楽しみはなくなるだろう。

買い物などが特別好きなわけではないが、

あちらに居た時に、学校の友達と他愛もないことを話しながら町を歩くのは好きだった。

こつした形で騎士団に入った以上、女性の、しかも同年代の友達など、できるわけがない。

いいところで、少し年上の、男友達といったところだろう。

それでも

（いつか、町に出たい）

声を弾ませて、戯れながら歩き去っていく使用人を、凜は見つめた。

20（後書き）

あとがきは活動報告で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8580w/>

騎士と鈍感っ子（仮）

2011年11月30日21時17分発行